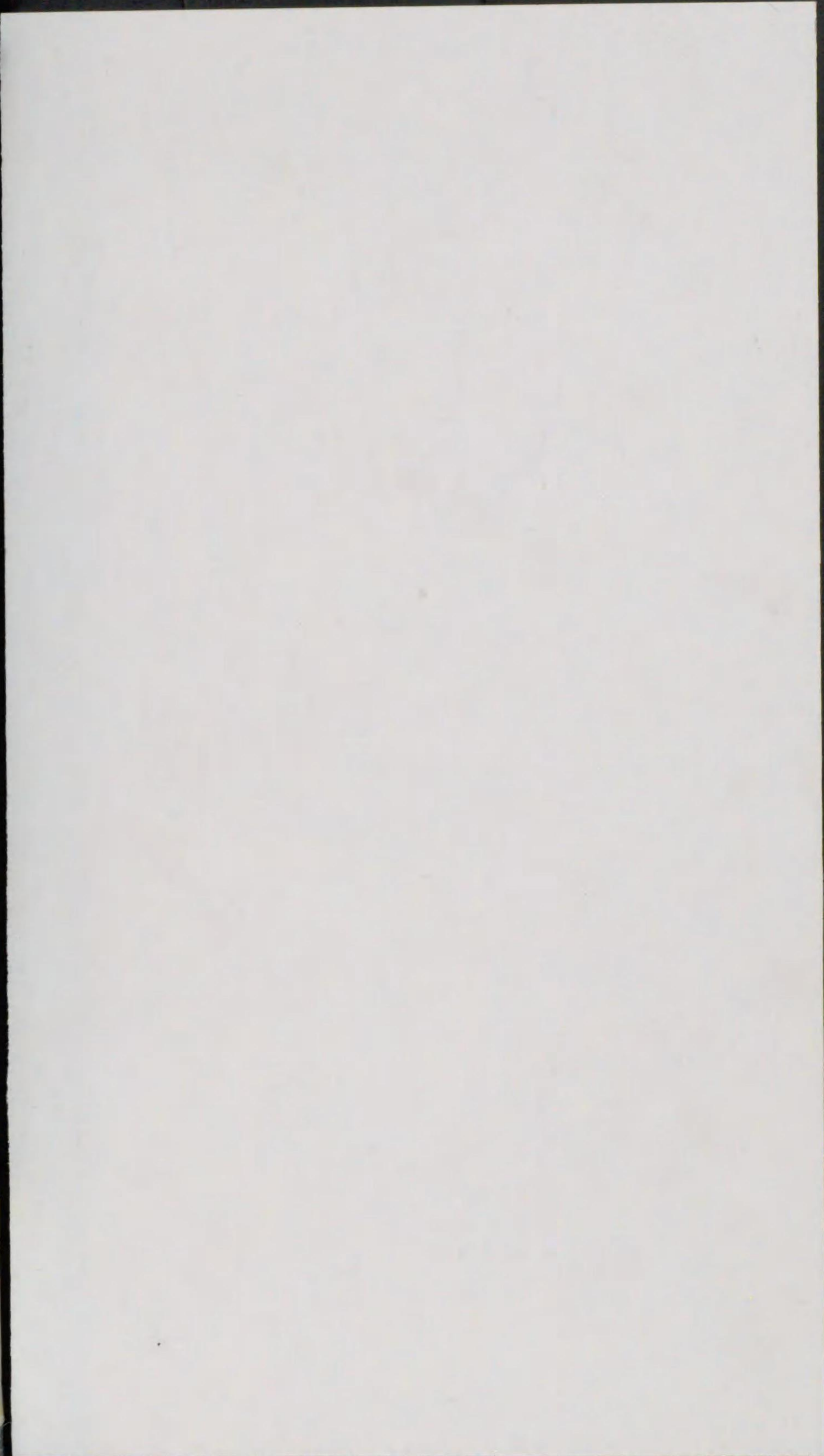


543-66



1200501503866

13
06







代歌謠集



緒言

本集は隆達小唄集以下十種を収め、近世俗謠の主要なるものを網羅せり。

一隆達小唄集

慶長より天和の頃まで隆達節とて専ら世に行はる。隆達の事蹟は堺鑑天和三年著

に「高三隆達」

元は日蓮宗の僧、常津顯本寺の寺内に住す。故ありて還俗し、高三氏の

家に往て樂種を商ふ、年を経て小歌の節を一流謳ひ出すより、世俗隆達流とて謳ひ賞翫

す」とある外所見なし。某氏所藏の肖像に「自在院隆達慶長十六年十一月二十五日寂八

十五歳」と記したれどいかどにや。慶長元和頃の年月日を記し自庵隆達と署名せる節付

の寫本往々世に存す。

實文の書籍目録にりうたつものうた一冊とあれば刊本もありしなるべし

就中大槻如電氏の藏本歌數最も多きを以

て之に據れり。

一吉原小歌總まくり 北里に流行したる小歌を集む。萬治板といふもの今存せず、所謂寛

文板なるもの二本を見たれども、序跋も刊行年月もなく、只紙末に「江戸さかい町中島

屋伊左衛門」と版元の名あるのみなり。種彦は其著足薪翁之記に天和二年印行とし、寛

文といふは誤也と斷言せり。とにかく初板を萬治三年再板を寛文二年といふは疑問なり。茲には文政二年琢玉齋の覆刻本を採用せり。

一山家鳥虫歌 京都大學藏本にて上下二册あり。下巻は寫本にて補足 諸國盆踊唱歌の外題にて我自刊

我書中に收めたるものの原本と思はる。我自刊我本之に上りたる國書刊行會本もは近江美濃飛驒信濃上野の部を闕き、尙其他三首合計二十三首を脱せり。我自刊我本の原本としたる種彦舊藏本

和田維四郎氏所藏は山城の部に一首不足したるのみにて、其他は遺漏なしとの事なれば、刊行の際寫しおとしよなるべし。

一糸竹初心集 一節切琴三味線の手引として著されたるもの、寛文四年版と寛文十二年版

山形屋吉兵衛板とあり、尙挿畫を改めたる零本を發見したれば、都合三版あるものの如し。本書頭註に再版本といへるは、寛文十二年版をさすものと知られたし。

一當世こつた揃 紙數十四丁の小本にて五ヶ所に遊女の繪を挿み、簡單なる詞がきを添へたり。原本は京都大學の藏本にて笠亭仙果の影寫にかゝる。元祿頃の刊行なるべきか。

一松の葉 組歌長歌端歌吾妻淨瑠璃投節等を結集し、採録頗る廣く、俗謡集中最も著名なるものにして、元祿十六年秀松軒の編する所なり。

一増補松の落葉 寶永七年扇徳の編にて、松の葉に漏れたる吾妻淨瑠璃踊歌歌舞妓芝居の唱歌等を收む。

一若みどり 寶永三年靜雲閣主人の編にて、長歌端歌吾妻淨瑠璃等の新曲を收む。正徳三年此書を續松の葉と改題したるも、たゞ吾妻淨瑠璃に「かよひぢ」の一曲を増加したるのみにて、其他は全く相同じ。

一松月鈔 琴の組歌の註釋書中最も古きものにして、元祿七年吉田邑琴子の著なり。元祿十二年出版の知音之媒といふ書は、これを剽竊したるものにて、挿畫を改め頭註の辭句を少しく改竄して別册に移したるに過ぎず。

一三阮歌曲解 上方唄の散紅葉と雪との評釋なり。こは萬葉集古義の著者として知られたる鹿持雅澄がすさびなり。

本集校訂にあたり、讀者の便宜を謀りて、句點をつけ、假名遣を一定し、漢字を宛てたれども、聊にても文意の疑はしきもの發音に差異を來すべきもの、清濁の轉訛等、すべて歌ひ物として注意すべき所は、一切原本のまよにして改訂を加へず。

大正四年七月

校訂者 藤井紫影

近代歌謡集 目錄

隆達小唄集	一—一四
よしはら小歌鹿の子	一五—三七
山家鳥虫歌	三九—一〇八
卷之上	四一
卷之下	八六
糸竹初心集	一〇九—一四四
上卷	一一三
中卷	一二八
下卷	一三九
當世小唄揃	一五—一六四
松の葉	一六五—一七三
第一卷	
本手	一六九

端手	一七五
裏組	一八一
祕曲相傳之次第	一八九
第二卷	
長歌	一九四
第三卷	
端歌	二四二
二上り	二六八
三下り	二七七
さわぎ	二八〇
第四卷	
吾妻淨瑠璃	二九六
第五卷	
古今百首なげぶし	三八
歌音聲並三味線彈方心得	三八
松の落葉	三三—三五
首卷	

あづま淨瑠璃	三五	長歌	五七六
小歌	三六二	第三卷	
卷第二		端歌	六〇一
當流淨瑠璃	三六六	第四卷	
卷第三		二上り	六二七
丹前出端	三九一	三下り	六四〇
古今ふし	四二二	さわぎ	六四四
卷第四		第五卷	
踊歌百番	四三五	半太夫節	六五二
卷第五		松月鈔	六六一—六九二
はやり歌	四七八	三阮歌曲 <small>知里毛美地遊幾</small> 解	六九三—七〇三
卷第六		落黄葉	六九三
當流所作	五〇七	雪	六九七
若みどり	五五七—六六〇		
第一卷			
長歌	五六三		
第二卷			

隆達小唄集

隆達小唄集

隆達小唄集



世は皆人のいひ
なれし世に面
意をかり言ひ
なれに結び成し
をかく
ふり一舉動
驚けし目をさま
せよる一眠る

あはてこがるく
一逢はて焦る
る、阿波て漕が
るく

一 君か代は千代に八千代にさどれ石の、巖となりて昔のむすまで
一 思ひ切れとは身のまよか、誰かは切らん戀の道

一 雪折れ竹をそのまよ垣に、世は皆人のいひなし
一 月夜の鳥はほれて鳴く、我も鳥かそなたに惚れて泣く

一 不審ならば鐘打たう、いや鐘も無益、たどふりにて知るものを
一 そなた故にこそ憂名の立つに、のう驚けよの、まづはおよるよの
一 相思ふ中さへかはる世の習ひ、ましてやうすき人な頼みそ

一 種とりて植ゑじ、植ゑなば武藏野もせばくやあらん、わが思草
一 みるめばかりに波立ちて、鳴渡舟かやあはでこがるよ

みるめー見る
目、海松

- 一 枕の海は浪立つばかり、さらばみるめのありもせで
- 一 逢はぬ恨みはつもれども、見れば言の葉もなし
- 一 うらみあるこそ頼みなれ、思はぬ中はふらずふられず
- 一 逢ふは稀よ獨寢はしけし、あの君ゆゑにあらぬ名の立つ
- 一 逢ふ時は秋の夜もはや明けやすや、ひとりぬる夜の長の夏の夜
- 一 縁さへあらば又もめぐり逢はうか、命に定めぬ程に
- 一 野分山おろしも身にしまぬ、宵々ごとに君を待つには
- 一 比翼連理のかたらひも、心かはれば水に降る雪
- 一 思はど君よ、しほひるまにも、必ず波のよるとなしとも
- 一 問へば問ふとてふらるよ、とはねばつらるよ
- 一 君待ちて待ちかねて、ちやうはんかねの其下での、したくしたくしたくしたくをふむ
- 一 いかにせんくとぞいはれける、物思ふ時の獨言には

ひるまー千る
間、晝間
よるー寄る、夜
ちやうはんかね
未詳

よのー感詞

- 一 な亂れそよの糸薄、いとど心の亂るよに
- 一 みめがよければ心も深し、花に匂ひのあるもことわり
- 一 君も見るやと眺むれば、うはの空なる月もなつかし
- 一 待てとはそなたのそら情心よ、いや待つまじや待つまじ
- 一 明日をも知らぬ露の身を、せめて言葉をうらやかに
- 一 歸る姿を見んと思へば、霧かの、朝霧が
- 一 ひとりも寝けるもの寝られけるもの、習はしよの、身はならはしのものかの
- 一 笑止や憂世やうらめしや、思ふ人には添ひもせで
- 一 袖を引くとて腹なな立てそ、深山石坂の坂のいばらを人のひかばや
- 一 月夜のうさよ、闇なるべくは曇らじをくもらじを
- 一 ちとせ経るとも散らざる花と、心の變らぬ人もがな
- 一 そなた故にぞ身を焦す、さらばけふりと消えもせで

歸る姿をー此頃
閑吟集に、うし
る影を見んとす
れば霧がのう朝
霧がとあり
身はならはしー
小町家集、手枕
のすきまの風も
寒かりき身はな
らはし物のにぞ
ありけるー閑吟
集に、ふたり寝
しものひとりも
くねられける
ぞや身は習はし
よのう身は習は
し物かな

しゅんなー身に
しみしゝ感ずる
意か

みゆるー會見
する

程一際限

- 一よしや思はじと思へども、心まかせにならぬよの
- 一志賀の浦とてしほはないが、顔のゑくほは十五夜の月
- 一物のしゅんなはの春雨、猶もしゅんなは旅のひとりね
- 一花に嵐の吹かば吹け、君の心のよそへ散らずば
- 一ひとり寝てふたりぬる夜の有様を、語るな人に、のう枕
- 一みゆると情あれかし、夢にさへつれなの振や、のう君は
- 一月は濁りの水にも宿る、數ならぬ身に情あれ君
- 一花よ月よと暮せ只、程は無いもの憂世は
- 一憂世は夢よ消えてはいらぬとかいのう、とけてとかいの
- 一せめて詞をうらやかにの、今歸るわれに何の怨みぞ
- 一夢は隔てず海山をこえても見ゆる、夜なくくに
- 一月待つ月はさえもせで、君待つ月はさゆるよの

やれ笠一破笠
きもせて一來と
著とにかく、此
明閑吟集に、一
は破れ笠上の
う、きもせてか
けてあかるく
とあり

- 一思ひよらずの會釋そしやくのふりや、恨みのこともはたと忘れた
- 一面影は手にもたまらず又消えて、そはぬ情の怨みかすく
- 一雨のふる夜の獨寢はいづれ雨とも涙とも
- 一引かば驛けとよ糸薄、枯野になればいらぬ憂身を
- 一怨みたけれども、いや身の程もなや、惣じて怨みも人によりぬ
- 一しばし待て硯の上のうす氷、打ちとけてこそ文もかよるれ
- 一身はやれ笠きもせで、すけなの君や掛けて置く
- 一しぐれぬもの神無月、晴れては曇りふりごころ
- 一君の心が變れかし、つれなき心の
- 一梅は匂ひよ木立はいらぬ、人は心よ姿はいらぬ
- 一武藏野のひとと薄、獨寢も憂やつれもなや
- 一とても名の立たば宵からおりやれ、よそへ忍びの歸るさはいや

頼むぞ云々我
傍なる扇も帯も
願はくば秘密を
洩す勿れ
いつもあかつき
一閑吟集に、め
ぐる外山に鳴く
鹿は逢うた別れ
か逢はぬ恨み
か
心氣—心のいら
だち惱ましきこ
と

一人は知るまじ我中を、頼むぞそばの扇も帯も
一とても消ゆべき露の身を、夢のまなりと夢のまなりとも
一いつもあかつき鳴く鹿は、逢はで鳴く音か、逢うて別れを鳴く音か
一いへば世にふる世にふるよ、いはねば愛人のそれと知らばや
一此春は花にまさりし君持ちて、青柳のいと亂れぬ
一心氣の花は夜々に咲く、情の花のひと夜咲かぬか
一鐘も鳴る夜も更けれ、あぢきな我身や、獨寢をする
一鐘さへ鳴ればもいなうとおしやる、こゝは佛法東漸のみなもと、初夜後夜の鐘はいつも鳴る
一長の枕に廣のしとねや、明けぬ夜や、さて捨てらるゝ憂身は
一生るゝも育ちも知らぬ人の子を、いとをしいは何の因果ぞの
一夏の夜を寝ぬに明くるといふ人は、物を思はぬか物を思はぬかの

のかいはなさい
一のけはなせ

落つる—戀にお
つるをいふ
色には出ぬ—出
ぬは出さぬと讀
むべきか

一のかいはなさい帯がとくる、今にかぎらうか逢はうものを
一獨寢もよやの、あかつきの別れ思へばの
一ひとり寝はいやよ、あかつきの別れありとも
一竹ほど直なる物はなけれども、雪々積れば末は靡くに
一月もろともに立ちいでて、月は山の端に入る、われは妻戸に
一亂れそめては人目もいらぬ、馴れぬ昔に思案せうすもの
一忍ぶ身にさへ悋氣をめさる、忍ばぬ身ならば扱何とあらうぞの
一そなた忍ぶと名はたちて、枕ならぶる間もなやの
一つれなのふりや、すけなの顔や、あのやうな人がはたと落つる
一忍ぶ身なれば色には出ぬ、あたど心をつくすよの
一八重だつ雲の上人に、馴れてくやしや捨てらるゝ
一人には馴れて馴れまじものを、今此思ひ何にたとへん

ひとよぎり一節切
わが輪が、我

一思ひきりたる雨の夜に、夢かや君のおとづれば
 一手に手をしめてほとくと叩く、我はそなたの小鼓か
 一誰かたれつくりし戀の道、いかなる人も踏み迷ふ
 一誰か再び花さかん、あたど夢のまの露の身に
 一ひとりおよらばまるらうずものを伽に、雨降り眞しんの闇やみなりと
 一夢にも見ゆらんとまどろめば、笑止と雨の枕うつ音
 一まどろまば夢にも見るべきに、うつよなや戀には目も合はぬものか
 一忍ぶ中よそへ漏すな、かはるとも、添はぬは憂世、名こそ惜しけれ
 一君かや闇には訪ひもこで、月にはあらはれて名の立つにの
 一尺八のひとよぎりこそ音ねもよけれ、君と一夜ひゃは寢も足らぬ
 一情かけうもの、くやしやな、なんほう戀には身が細る
 一人はよいものとにかくに、やぶれ車よわがわるい

なと一何と

便なけれども一不都合なれども

一曇らばくもれ照るとても、君を思ひの晴るよでもなし
 一又も逢はうずは不慮でん、優曇華の花今ばかり
 一花を嵐のさそはぬさきに、いざおりやれ花をみ吉野へ
 一花を嵐の散らすやうな雪に袖打拂ひ、誰たれかおりやらうぞの
 一花が見たくば吉野へおりやれの、吉野の花は今がさかりぢや
 一あるはいやなり成るもいやなり、思ふは成らず、扱もよしなやな、なとせうぞの
 一立たば立て我名、君ゆゑならば惜しからぬ命
 一愷氣心か枕な投げそ、投げそ枕に咎とがはよもあらじ
 一いやくは思ひの餘りのうら、合せてたまうれ合せてたまうれ、とにかくに
 一ちたびもよたびおしやるとも成るまじものを、うつよなのそなたや、我にぬしある、
 一思ひ切れとよ
 一たとへ事には便びんなけれども、身の影法師かげぼうしに君をなして添はいで

かたびら雪―大
びらの雪をいふ

寝ならし―寝巻
をいふ

磯にすむまじ―
此頃閑吟集に、
みるゝ戀とな
る物をこもり
みるめ―海松、
見る目

なは―尙一層面
白かるべし

一忘るゝものを又ふりかよる、かたびら雪の消えもせで
一帯をやりたれば、しならしの帯とて非難をおしやる、帯がしならしならば、そなたの
肌は寝ならし

一つよめども色は涙にあらはれて、袖にとく／＼とく／＼とく／＼と

一千夜もよは及びなや君、いなの小篋のせめてひと夜を

一つよめども色には出るぞ、これ見よ袖の涙を

一磯にはすむまじ、さなきだにみるめに戀のまさるに

一逢へば人知る、逢はねば肝がいらるゝ、あ笑止やの

一いとはるゝ身となりはてば、せめて我身の咎も身の咎も身の咎もがな

一初夜かと思つた、あ憂や、別れの六つぢやもの

一おもしろのお月や、ふたり見ばなほ

一君の情の深きゆゑか、思ひし程は名も立たぬ

わざくれ―まよ
よ

目には見て―伊
勢物語の歌

一寝ても覺めても忘れぬ君を、焦れ死なぬは異なものぢや

一夢に見えつうつゝに馴れつ、あ笑止とさらぬ面影や

一闇にさへならぬ、月にはとても、あら鈍なお人や

一山の端にこそ月はあれ、戀の道には月もなや

一夢の浮世の露の命の、わざくれ成次第よの、身は成次第よの

一色よき花の匂ひのないは、うつくし君の情ないよの

一月の夜にさへ來ぬ人を、なか／＼待たじ雨の夜に

一ひとりも行きぬ、ふたりも行く、残りとどまれと思ふ人も行きぬ

一目には見て手には取られぬ月のうちの、桂の如き君にぞありける

一來ぬ人をまつの葉に降る白雪の、消えこそかへれ消えこそかへれ

一とはれぬ程は曇らば曇れ、つひにうつさん袖の月影

一思はど思へ恨めしのふりや、報の早き世にありながら

鐘打たう一仕馴
れたる業をはた
とやむる事をい
ふ、佛家の儀式
の合圖より起り
し語なり

うらみね一怨
寝、浦見ね

一日ぐれくにかどに立ち見ては、君をよそながら
 一咲く花も千よ九重八重櫻 何ぞ我身のひとはな心
 一よそのつらさを見ればこそ君のお情の思ひ知らるれ
 一逢ひも見もせぬ咎もなき我に、悵氣めさるゝ、鐘打たうかのそなたに
 一逢はぬ程こそ頼みなれ、今朝の別れの、あ物憂や
 一君ゆゑにかゝる憂名の立田山、もみぢ葉よ只色にでて
 一夢になりとも情はよいが、人のつらさを聞くもいや
 一君ゆゑならば雪の野に寝よよ、よしや此身は消ゆるとも
 一いやとおしやるも頼みあり、青柳よりも雪をれの松
 一富士や浅間も何ならん、君思ひ寝の胸のけぶりば
 一底は打解けてうはの空するふりは猶いとをしい
 一君は月思ひ明石のうらみねは、すまの浦波須磨の浦

只置いて一此唄
閑吟集にあり
そなたよりこそ
一そなたより此
方にこそ怨みは
あれ

うき世もめされ
一浮世狂ひ即ち
色遊びもせよと
也

一只置いて霜に打たせよとかいの、夜ふけて来たが憎い程に
 一思ひよらずの腹立て顔や、怨みは数々そなたよりこそあるものを
 一叩く妻戸はあけもせで、まづは明けたよ、ほのふくと明けた
 一數ならぬ身には思ひのなかれかし、人なみくに物思ふ
 一八島の磯の荒波かそなたは、寄せつ打ちのけ物思はする
 一ぬれてこそ歸るらう君は朝露に、我袂もかわかぬものを
 一鳥と鐘とは思ひの種よ、とは思へども人によりぬ
 一ふりよき君の情のないは、冴えゆく月にかゝる叢雲
 一逢ふまでの命もがなと思ひしに、くやしや君のつらければ
 一すみかとして柴のいほりもなつかしや 都なれども旅は憂いもの
 一後生を願ひうき世もめされ、朝顔の花の露よりあだな身を
 一心なしとはそれゆよ、冴えた月夜に黒小袖

文祿二年八月日

自
隆
庵
達

石上いそのかみ古き世の物を見れば、其比はとありけんかよりけんと、萬よろづの事どものばれてすどろ
にゆかしくなん、爰に同じ心の友人琢玉齋とくぎしやうの翁おきな今より百とせあまり六十年ばかりあなた萬
治三年といふとし板にゑりたる新吉原のゑざうしの、たまさかにやれ残りて友だちのひめ
置きしを、此度せちに乞ひ求め寫しとりぬとて、もてきませるを見れば、今様とは事かは
りいたく古代にて、遊女あそびのかた小歌のさまみやびかにをかしう、さらにく目とまる双紙
なりけり、かゝる珍かなるものをいたづらにせんも惜あはらしきわざなれば、同じくは昔慕ふ
ともがらの爲に、再び板にゑらんとて、おのれにはし書乞はるよを、稻舟のといらへつれ
ど、しひてもよほさるればすべなう、聊その故よしつかいぬ、文政二年といふとしの彌
生のはじめ

上のさまーかの
さまの誤なるべ
し
久よ、ため上、植
るよーいづれも
「よ」は「し」の衍
詞花集「君が代
の久しかるべき
例にや神も植る
けん住吉の松」
住よこー住よし

吉原はやり小歌そうまくり

- さかなはうたづくし
- 一 ゆくすゑ廣き武藏野の、廣き恵みのくゝをりなれや
 - 一 横の戸よりて明石の月を見つ人心、天津乙女のへだてなく、思ひ思はず物がたり、長
き夜すがら幾秋も
 - 一 くるくゝとめぐり合ひ、はやよのさまにいつか逢瀬の浪枕
 - 一 あめが下皆うるほひて、二葉の松もはえそへて、千代の初めにくゝ
 - 一 君が世の久よかるべきためよにも、かねてぞ植ゑよ住よこの松
 - 一 山鳥たれを恨みて墨染に、浅き契に相馴れそめて、中々今は中々に
 - 一 人買舟かうらめしや、とても賣らるゝ身ぢや程に、靜に漕ぎやれかんだどの

の誤
かんだのーか
んどり(桐取殿
の意か、閉吟集
には「人買舟は
沖をこごととも
齊ちるく身を只
靜にこげ上船頭
殿」とあり
あの子さまー此
頃「梨の木育ち
ゆすれど落ちぬ
梨の木上」の誤
か

ましーぶしの誤
なるべし
あらしー近江の
誤か 近江菅笠
は名産也
笠もてー笠買て
の誤か

一昔見し月の光をしるべにて、今宵や君西にゆくらん
一浅き契に相馴れそめて、中々今はすむまじきぞ我心
一あの君さまに久しうて見れど、白玉椿色も變らぬよ
一あの君さまはなめの木の育ちゆなれど、落ちぬめなしの木よ
一情の花は逢ふ時ばかり、別れになれば萎れ萎るよ
一昔も今も戀する人は、身につまされていとしう御座るよの
一十五や六の座敷のかざり、芍薬牡丹庭のかざりよの
あふみかはりまし

一これから見れば上野が見ゆる、湯島浅草隅田川、あらしにつどく笠もてたもれ、上野
編笠を

れんぼのかはり
一君は五月雨おもはせぶりや、いとど焦るよ身は浮舟の、浪にゆられて島磯千鳥、れん

れんれくれつれ
ーはやし詞
れんぼー戀慕

背戸マーヤは接
尾辭

一節切ー一夜限
にかけてふふ
いのたけー心の
たけの誤なるべ
し

けうとげー氣疎
氣にて淺ましや
の意

れよれつれ

一ゆふべくーに身は浅草の、露を踏みわけあの吉原に、しどろもどろと君ゆゑ迎る、れ
んほれよれつれ

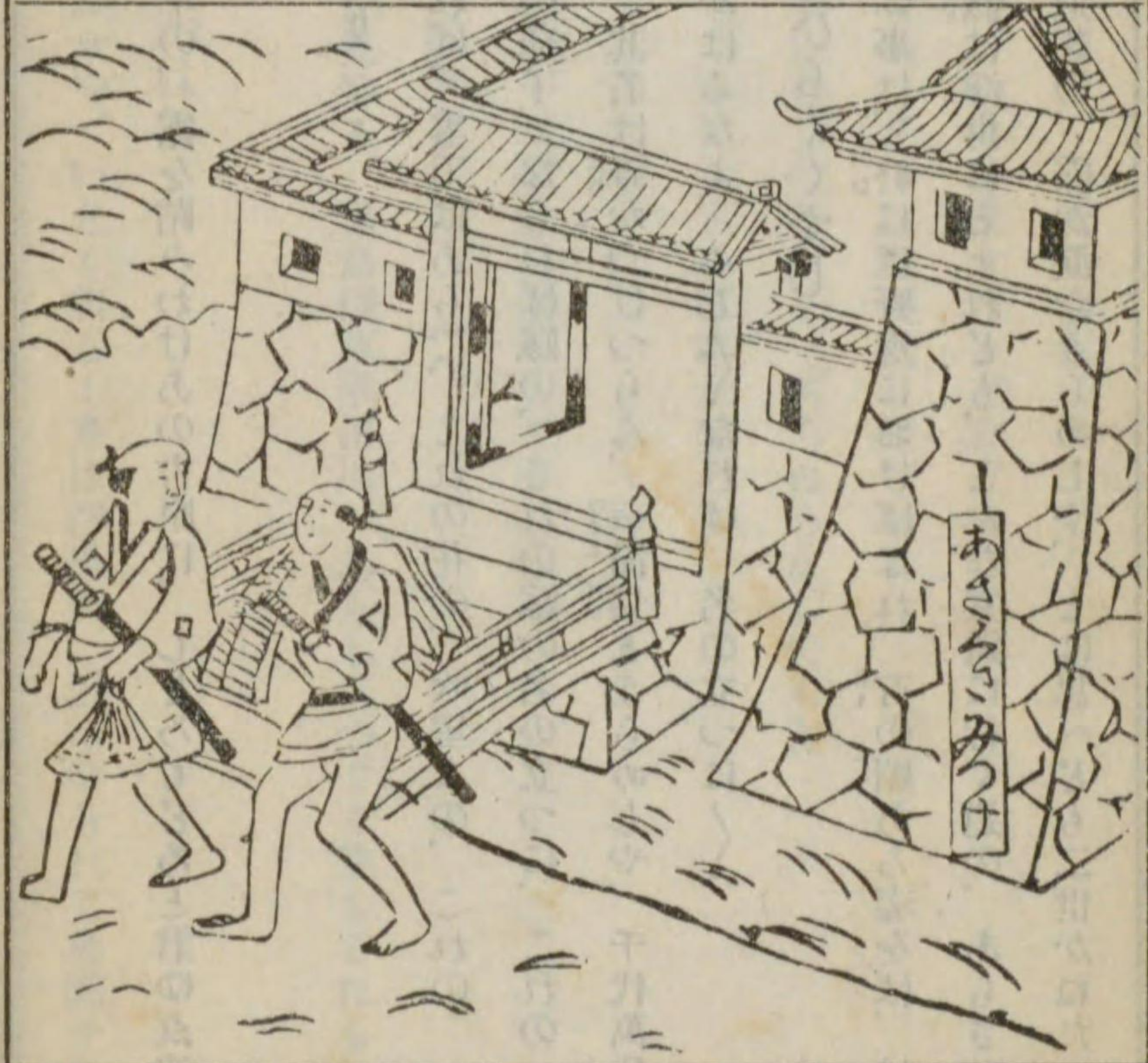
ひとよぎり

一吉野の山を雪かと思れば、雪ではあらで、これの花の、吹雪よの、これの
一なれくー茄子背戸やの茄子、ならねば嫁の、これの嫁の名の立つに、これの
一君があそぼす尺八を、其名は誰かつつけつらん、一節切とうらめしや、千代萬代のよを
こめて、いのたけはかはるなよ、ふしぐなれば、名の立つにく

夢の通路ひらくくずし

一人の身を露の命といふ事は、終には野邊におけばなれ、百の媚ある姿をば、けうとけ
野らに捨てられて、骸は浮世にとまれども、こんな冥途に行く道の、あらさびし此旅
の空、誰に問はまし道芝の、露か涙かうらめしや、とは思へども二世かねたるしるし

あさけの花はあはれ
 くらりつれはあはれを
 ちやれを御
 昔も今もこゝろ
 人とは方につまされて
 いまもあはれ
 一十のや六のさき
 さきりしややく
 せんはあはれ
 あはれを
 一これこれの
 中もゆきまあき
 すも川あはれ
 ときまえて
 のあみさきと
 せんあはれ



あはれを
 一これこれの
 中もゆきまあき
 すも川あはれ
 ときまえて
 のあみさきと
 せんあはれ
 あはれを
 一これこれの
 中もゆきまあき
 すも川あはれ
 ときまえて
 のあみさきと
 せんあはれ



よし原小歌鹿の子

ともうけへ誤
字あるべし

なほすな直す
のは

たへかいちかい
に互ひちがひ
の意か

おもはく情人
なきこの酒な
さけの酒の誤か

には、憂きもつらきも君とわれ、同じ冥途の苦みは、ともうけへはうらめしや

ほそりづくし

一ほそりのやれ出所は大和の壺坂、その節なほすな美濃の谷汲、おしやれば誠にのうさ
て美濃の谷汲

一われも他國よ、貴所さまも又他國よ、たへかいちかいに、のうさてお目をくださあり
よ、おしやれば誠にのうさてお目をくださりよ

一城の御門で今朝見た又若衆は、筆がな墨かな、のうさて硯紙がな、繪に書き寫して、の
うさて國の土産に、おしやれば誠に、のうさて國の土産に

れんぼのきぬた

一あはれなるかな人々は、勤も今はうかくと、只いたづらになり給ふ、ある夕暮の事
なりしに、あまり彼の方戀しさに、いざやそもじをおもはくと名づけて一夜あかさ
と、傍輩ながらたはぶれて、なきこの酒と名づけつよ、さいつさよれつ諸共に、くど

いて見給へ往
て見給へ
しばたちいで
しばたちいで
の誤か

そさむ一前にそ
みんとあり、原
本のまく
かそみん一かの
そみんの誤か

薄雲一遊女の名

紫一同前

き事こそいたはしけれ、いつかがやうに彼の方と、一夜なりともわがまよになさば、

などかは今の思ひは有明の、月まつ程のうたゝ寝も、ならぬ此身はそもいかに、いつの
世の報いぞや、とは思へども御身と我身かはらずば、末は逢瀬となるべしと、思ふ心

をたよりにて、少しの憂きを凌ぎけり、かゝる所にいづくともなく、物音高く聞えし
は、もしも籬の音なるか、いて見給へとありしかば、しばたちいで其方のかたを眺む

れば、砧の音こそ聞えける、けにや我身の憂きまよに、古事の思ひ出でられて候ふぞ
や、唐土にそみんといつし人は、胡國とやらんに捨ておかれしが、故里にとどめ置き

たる忍び妻、そさむの寢覺を思ひやり、高樓に登つて砧を打つ、思ひの末の通りける
か、萬里の外なるかそみんが方に、故里の砧聞えけり、それゆゑ憂きをも凌ぐかなれ

ば、わらはも思ひや通らんと、とても淋しきくれはどり、綾の衣を砧に打ち、少しの
思ひを晴らさんと、薄雲きぬを取り出だし、いざ／＼砧うたんとて、馴れてふすまの

床の上、涙かたしく狭筵に、紫たちより諸共に、怨みの砧うつとかや

よし原小歌鹿の子

きぬたのまき歌浄瑠璃

一衣ころもにおつる松の聲、夜さむを風や散らすらん、おとづれのく、稀ひらなる中の秋風あきかぜに、憂うれきを知らする夕ゆふかな、面白おもしろのをりからや、頃ころしも秋の夕ゆふつかた、小鹿こじかの聲も物ものすこし、見ぬ秋風を送り来て、梢しほはいづれ一葉ひとは散る、空そらすさまじき月影つきかげの、軒のきの葱しよにうつろひて、露の玉たまだれかよる身の、思おもひをのぶる夜もすがら、嵐あらしの音を残すなよ、今の砧あしの聲こゑそへて、君がそなたに吹けや風、あまりに吹きて松風しょうふうよ、れいせい節ふしわが心通こゝろひて人に見ゆならば、よその夢ゆめばし守るなよ、破やぶれて後は此衣このころも、たれかきたりて問ふべきと、きて問ふならばいつまでも、衣はたちもかへなん下歌夏衣なつころもうすき契ちぎはいまはしや、君が命いのちは長ながき夜の、月にはとても寝られぬに、いざく衣ころもうたうよ、彼の棚機たなごりの契ちぎには、一夜ひとよばかりのかり衣、天あまの川波かみなみたちへだて、逢瀬あはせかひなき憂うれき秋の、梶かぢの葉もろき露つゆ涙なみだ、二つの袖そでやしほるらん、水みづかけ草くさの露つゆならば、波なみだうちよせようたかたの、そのはうたふし文月ふんづきの曉あけや、八月九月はつげつけにまさし、長ながき夜のく、月の色いろ風かぜけしきまで、砧あしの

きたりて一來と
著きとにかく
問とふべきと一問
ふべきとの衍のりか

音ねや夜嵐よあらしの、悲かなみの聲虫こゑむしの音ねの、まじりて落おつる露つゆ涙なみだ、ほろくはらくといづれ砧あしの、聲こゑやらんく

かはり伊勢ぶし

一我庵わがあんは都みやこの巽たつみしかぞすむ、世よをうち山やまと、えい人ひとはいふなり喜撰きせん法師ほうしよ
ひきよく

えい一感詞

一天下あま泰平たいへい長久ながひさに、治ちる峯たかねの松風しょうふう、雛鶴ひなつるぎはちとせふる、谷やの流ながに龜遊かめあそびぶ
一桐壺きりぎりすの更衣かへろの、比翼ひよく連理れんりの契ちぎも、定めなき世よの習ならひとて、夢ゆめのうちぞ悲かなしき
一たそや此夜このやちや中にまぎれ、板戸いたどを叩たたくは、雲井くもいの雁かりがねか、水雞くひなの告つぐる聲こゑ々
一うらめしき我縁わがえん、薄雪うすゆきの契ちぎか、消くえにし人の形見かたみとて、涙なみだばかりや残のこるらん
一行いっぺいき暮くれれて旅たびの道みち、うらぞ淋しみしき浪なみの音ね、かへろうと鹿かの鳴なく聲こゑに、我わがも夜よすがら泣なきあかす
一武藏むさしの野邊のへに月の出でづべき山やまもなし、町まちよりいでて町まちにこそ入れの

かへろう一鹿の
鳴聲「かへろ」
に「歸らう」をか
く

ふかみーふかの
(深野)の衍、山
家鳥虫歌にも此
唄あり
ゆへーいへの詠

一見れば見渡す棹さしやとどく、なぜに我戀とどかぬぞ
一聲は聞けども姿は見えじ、君はふかみのきりくす

雲井のろうさい

一文はやりたし我身は書かず、物をゆへかし白紙が
一思ひ捨つるな叶はぬとても、縁と浮世は末を待て
一花は散りても又春咲くが、君と我とは一さかり

吉原かばりたごのり

一花を吉野と見る人の、戀路に迷ふ三谷のはて、情に思ひ染川や、末を高瀬と聞くから
に、同じ初瀬の浪枕、君もろともに因幡山、松が枝花の藤波や、河内八橋をりを得て、
われは思ひにやせわたる、わかれく和泉の玉川や、されば千手の誓にも、枯れたる木
にも花さきや、若狭は二度となきものをと、何歎くらん思ひあかしやと、御利生ある
こそ嬉しけれ、めては若山せいしゆの君、けにや誠に痴話事の、ころは吉田のなりの

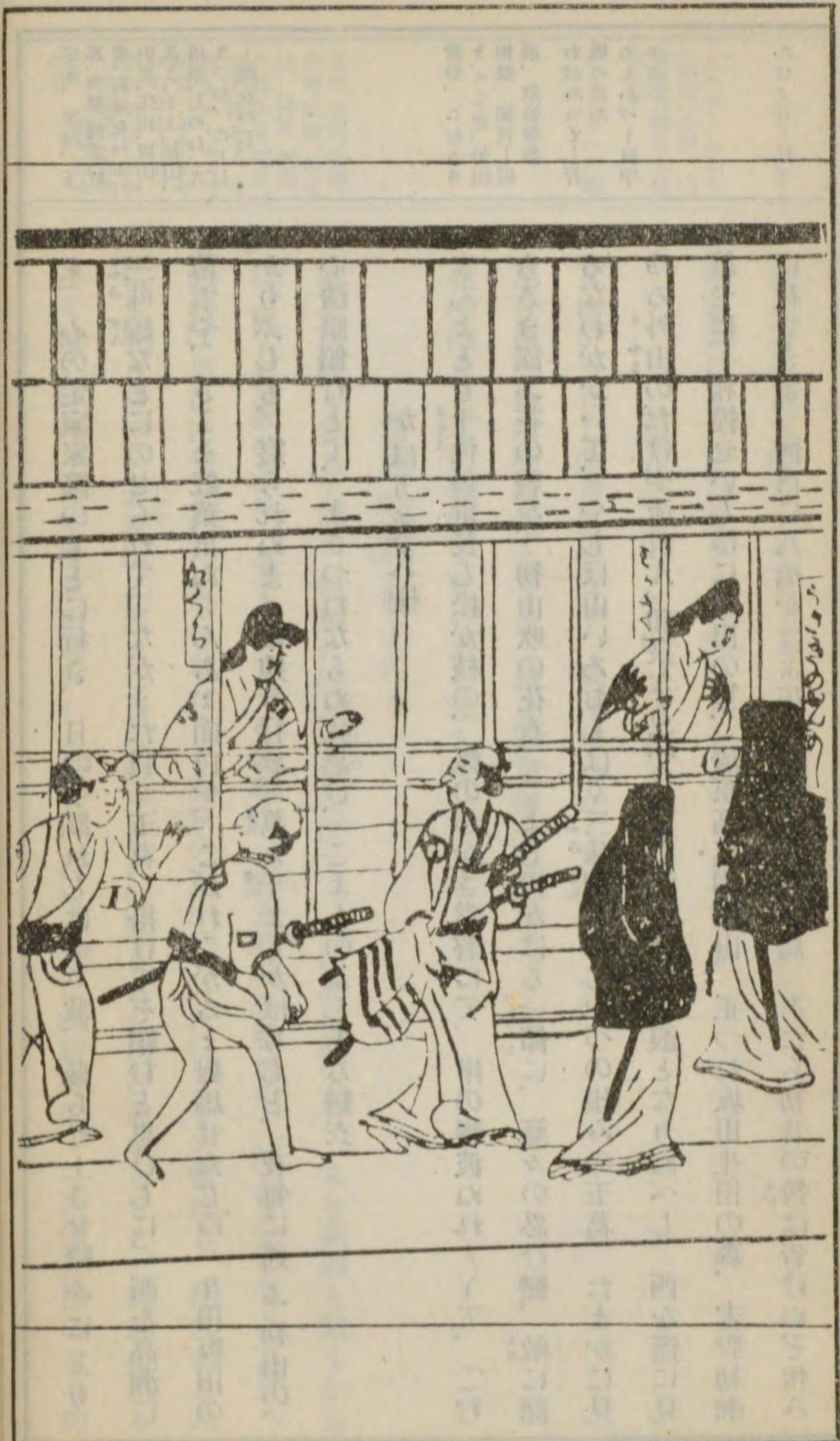
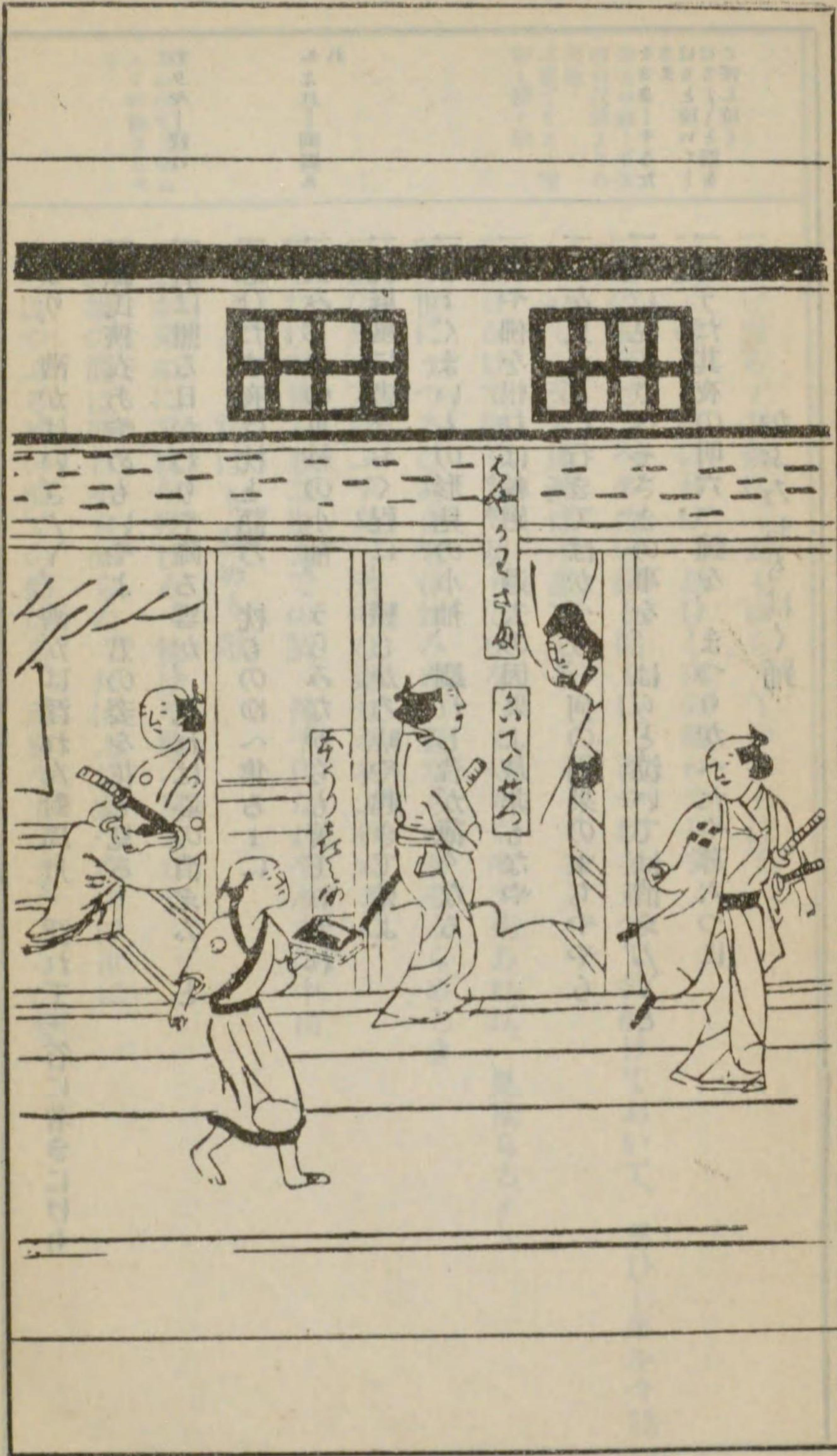
吉野、染川、高瀬、
初瀬、因幡、松が
枝、藤波、河内、
八橋、和泉、玉川、
千手、花さき、若
狭、あかしゆ(丹
州也、あかしや
は衍なるべし)
利生、若山、せい
しゆ、勢州、吉田
の名
—遊女の名

末、心の定家家隆のもとに行き、日頃手馴れしはやり歌、参らせ上させ給ふにより、
三味線などにのせられて、ながうた貫く玉葛、掛けてぞ頼むと思ひしに、西を高瀬に
薄雲や、さこそ紅葉出ぬらんあま面白や、こがれこがるゝ對馬せんじゆ、生田坂田の
かりぶしも、寝られぬまよに辿り行き、萬よ千よもかはらじと、夜毎に通ふ初山の、
心清原頼むとて、まさつねならぬ我思ひ、こよしのよしある戀衣

かはり美人揃

一まんよとも千代の世長し松が枝の、縁のわかさ常磐にて、岸の藤波ぬれくして、こむ
らさき添ふ花の香を、初山吹の花衣、こよしのかはる一節に、籬々の忍び戀、敵に語
るなわがかいて、やしほ山いろおもはく三味線、ぬしかづの恨みの玉葛、たまかに見
ゆる外山のだけや流れん、和泉なる深き姿玉川や、高瀬の浪となりぬべし、西を遙に見
渡せば、相摸せいしゆに吉田の里、清原高尾因幡山、正つね坂田生田の森、吉野初瀬
に花さきよ、河内に八橋かはよ花、花のさそふ時鳥、あたら初音の咎は告げぬぞ恨み

常磐、こむらさ
き、やしほ、外山
相摸、初音、同
前、前條參照
わがかいて、若
楓の誤か
ぬしかづ、誤字
あるか
かはよ花、杜若



わりやー我は

およれー御寝あ
れ

そさまーそなた
さま
はらと泣いてー
はらと泣いてー
こぼし泣く

なり、漕がばいざく、漕がば浮れん對馬舟、浮れて三谷に著きにけり

一源氏狭衣あやめもいやよ、君の姿を花と見る

一君は照る日かわりや降る雪か、見れば心の消えぐくと

一思ひだす夜は枕と語る、枕ものゆへ焦るよに

一表みじかの更紗の小袖、うらみながらも著ておよれ

一枕屏風に書きおく程に、戀しかる時や起きて見よ、

一すよぐまいもの形見の小袖、馴れし昔が薄くなる

一神や佛を恨むは輪廻、過去の因果よ是非もなや

一君を見たさに行きてはかへり、何の因果の末ぢややら

一夢に見てさへそさまの事を、はらと泣いては消えぐくと

一逢うた其夜の明六つ鐘を、まつりかへたや暮六つに

かぶろおもはく踊

多生の縁ー多生
曠劫以前よりの
因縁
不慮でそらー豫
期し難く候

来ぬにてー来ぬ
とての誤なるべ
し

一思ひ別ると其曉は、鳥もはらくわれも泣く

一涙で曇る今宵の月は、思ひし山の晴れやらず

一袖の振合せさへ多生の縁と聞くに、況や枕を並べて打解けておいて、思ひし事を今語

らいで、又も逢瀬は不慮でそら

一月日かけて變らじと契りし中を、くやしや増す花あれば、見捨らるく

一浮世にうつろひ易き君は恨みぬ、數ならぬ身ぞうらめしき

一嵐の外の友呼ぶ千鳥、君呼び返せ小夜ふけぬまに

一年たけて見るも二世までの契、幾千代なれや小夜の中山

かはりぬめり歌

一君が来ぬにて枕な投げそ、投げそ枕に科もなや

一狩場の鹿は明日をも知らぬ、たはぶれ遊べ夢の浮世に

一ちはやふる神の前での鈴の音、神樂少女のさつぐの聲

よし原小歌鹿の子

見ぬまでも見ぬまではの誤かたれ始めし此唄隆達小唄を二首連結せし也

しば一婆婆の誤なるべし

すくぐまいもの此歌重出てんと天道にて響詞也

ゆひ立て一言ひたて、結立

一衣紋つくひ通へども、相見る事は程を経て、逢ふは優曇華嬉しやな
一見ぬまでも夢うつよとも思ひしに、今見こがるよそもじ故かな
一たれ始めし戀の道、いかなる人も踏み迷ふ、秋の夜もはや明けやすや、獨ぬる夜の長の夏の夜や

一名にも似ず白波たてるすみだ川、見ても見飽かぬ吉野櫻

一未生みじやういぜん以前が遙にましぢや、何の因果にしばへ来て

一すくぐまいもの形見の小袖、馴れし昔がうすくなる

一てんと八幡此上からは、立つや浮名は無むにせまい

一うつよか夢か幻の身をもちながら、遊べや歌へ酒さけ飲みて

一浮世に住めば思ひの増すに、月と入ろやれ山の端に

一ちらりくと花めづらしき、雪の振袖ちらと見そめしより、今は思ひの種となる

一菊のませ垣ゆひ立てられて、今はなかくすいられぬ

誤ぬ一られすい字あるべし

右此歌は直之以正本令板行者也

ゆひ立て一言ひたて、結立
見ぬまでも見ぬまではの誤かたれ始めし此唄隆達小唄を二首連結せし也
しば一婆婆の誤なるべし
すくぐまいもの此歌重出てんと天道にて響詞也
ゆひ立て一言ひたて、結立
一衣紋つくひ通へども、相見る事は程を経て、逢ふは優曇華嬉しやな
一見ぬまでも夢うつよとも思ひしに、今見こがるよそもじ故かな
一たれ始めし戀の道、いかなる人も踏み迷ふ、秋の夜もはや明けやすや、獨ぬる夜の長の夏の夜や
一名にも似ず白波たてるすみだ川、見ても見飽かぬ吉野櫻
一未生以前が遙にましぢや、何の因果にしばへ来て
一すくぐまいもの形見の小袖、馴れし昔がうすくなる
一てんと八幡此上からは、立つや浮名は無にせまい
一うつよか夢か幻の身をもちながら、遊べや歌へ酒飲みて
一浮世に住めば思ひの増すに、月と入ろやれ山の端に
一ちらりくと花めづらしき、雪の振袖ちらと見そめしより、今は思ひの種となる
一菊のませ垣ゆひ立てられて、今はなかくすいられぬ

我友丈河ぬし年来ひめ置かれたりける吉原小歌總まくりといふ冊子を見れば、まづ客人の廓通のところを初めて、うかれめの座敷のかた、はた其比の小歌をさへ書きまぜて、それがはしに萬治三年とあり、其古雅なる事いふべくもあらず、抑々吉原町の傀儡屋はいぬる文祿慶長のころほひ此大江戸の大城ちかくところぐに在りけるを、庄司何がしといひし人おほやけにねぎ奉りて、元和三年といふ年堺町の下つかたへ彼のくどつ屋を一つにつどへ移して葭原町とぞいひける、此時葭の字を吉の字に書き改めたりといへり、其後明暦丁酉軻遇突智神のあらびありし年また千束の龍泉寺村へ移されて、はじめて新吉原町となんいひける、かくて此冊子に萬治三年とあれば、今の新吉原町いできはじめて僅に四年といふとしの刊行なりけり、されば此年文政二年まで凡百六十年に及べり、其風俗の質素小歌の古雅なる事誠に今の世のさまとは異にして珍しともめづらかなりかし、かよる惜しき冊子をいたづらに紙魚の棲となさん事いとくちをしきわざなれば、丈河ぬしと謀りて、いささか落字をも補はず訛字をも正さずありつるまよに謄寫して、再び櫻木にはゑりぬ、只お

のれが本意はふるきを後に傳へん事を思ふのみなん

琢玉齋主人しるす

山家鳥虫歌
 山家鳥虫歌の歌は、山家牧歌の一種として、
 自然の風景を背景として、鳥や虫の生活や
 人間の生活を描き出す。この歌は、
 自然の美しさを賞讃し、人間の生活の
 苦楽を表現している。

山家鳥虫歌

山家鳥虫歌の歌は、山家牧歌の一種として、
 自然の風景を背景として、鳥や虫の生活や
 人間の生活を描き出す。この歌は、
 自然の美しさを賞讃し、人間の生活の
 苦楽を表現している。

山家鳥虫歌序

山家鳥虫歌序

夫仁は心の徳五倫は常の道にて、此世の中にある人ごとに是を亂すは人といふべけんや、かくありて事の繁き中見る事聞く事につけ言ひ出せる山々里々に稻刈り麥搗くことわざ聲おもしろく諷ひなす賤の女の一節、いかなる故の心にやあらんと耳をかたぶけても、其心分ちがたく、故に尋ねて筆にしるし、其風俗を見れば幾千世と君を祝ひ身にすぎ樂みの餘り、荒れたる家にむぐら這ひかより、よもぎなど高く生ひたる庭にたくはへ置きし糶を取りいで、あやしきさましたる女ども化粧して、をのことに共に白挽歌うたひ、心地よけに疲れをはらさんとて、かたへの牛飼ひ所に休み、煙草のむ間に茶うけと名づけ、こき茶に熬米を入れてをさな子ども持ち運ぶ有様、瓢箪屢空し顔淵の樂みと思ひ出られて、あはれに思はるゝ其言の葉、たが言ひなしたらんも知らず、世の風俗として花になく鶯水にすむ蛙の聲、いづれか歌をよまざらんと古事にあるよしして、山家鳥虫歌と名づけて、その所々の國風もしらるべきやと集むるもの也。

明和八辛卯冬

天中原長常南山序

山家鳥虫歌 卷之上
 目録 卷之上 本朝 三十八箇國
 卷之下 同 三十八箇國
 夫つお心の御八箇お常の歌つア、北世の中ゴもさ人ごご長を所すお人ごつふへりい
 山家鳥虫歌

山家鳥虫歌 卷之上

山城國風

- ▲めでたくの若松さまよ、枝も榮える葉もしける
- ▲ことし御じやうらく、うへさまはんじよ、花の都は猶はんじよ
- ▲稻は刈り取る穂に穂がさいて、どこに寝さしよぞ親ふたり
- ▲親子つまとも田を植ゑしまひ、神に千歳ちとせのたねをまつ
- ▲こいとたがいうた笹原こえて、露に小松は皆ぬれた
- ▲ござる其夜はいとひはせねど、くるがつもれば浮名たつ
- ▲わしは小池の鯉鮒なれど、なまづ男はいやでそろ
- ▲忍ぶ道には粟黍うゑな、あはず戻ればきびわるい

御じやうらく
 御上洛、寛永三
 年秀忠上洛の時
 の歌なり
 はんじよ一繁昌

黒日一曆に黒點を付するより俗に黒日といふ愛死日と稱して大悪日なりとす

幾世長かれ此歌誤脱あるべし

さつき野五月頃の野邊かきはなげかけの釣を投げかけの誤なるよし

- ▲こなた思へば千里も一里、あはずもどれば一里が千里
- ▲いとま下され後日は待たぬ、あすは黒日で日がわるい
- ▲戀にこがれて鳴く蟬よりも、鳴かぬ螢が身を焦す
- ▲飲みやれ大黒歌やれ蛭子、殊にお酌は福の神
- ▲幾世長かれ此殿のめぐみ育ちて若菜つむ
- ▲さまはさんやで宵々ござる、せめて一夜はありあけに
- ▲高い山には霞がかよる、わしはこなたに目がかよる
- ▲縹子の袴の襷とるよりも、さまの機嫌のとりにくさ
- ▲舟は出て行く帆かけて走る、茶屋のをなごは出て招く
- ▲招けど磯へよらばこそ、思ひ切れとの風が吹く
- ▲さまの寝姿けさこそ見たれ、さつき野に咲く百合の花
- ▲かきはなげかけゆすらば落ちよ、心つれなや山桃よ

秋の山一鳥羽の名所

圖に出す一原本黒木と櫻の枝とを畫きたる盃の圖あり、略之

- ▲こなた思へば野もせも山も藪も林も知らで來た
- ▲いとしとのごの目元のしほを、入れてもちたや鼻紙に
- ▲こひといふ字がありやこそきたれ、鳥羽の戀塚秋の山
- ▲さてもよい子や黒木賣のむすめ、戀の重荷がかつきつれ
- ▲山にさく花あらしが毒よ、わしは君さま見るが毒

凡二十五首

君を松にたとへ千代萬代まで榮え給へと祈りし賤の女の心ばへ、又は豊年の貢を祝ひ、妻子おくにのるの心、孝弟の道まなばずして人情感すべき事なり、他の國にすぐれ水清く男女ともに色白く詞おのづからわかれて滞りなし、孝弟の道は國々同じといへども記すにいとまなし、五畿内の外は大概をのぶる、此國に大原盃といふあり圖に出す、東山殿時代此盃出來、蒔繪小原木のもやう故大原と申す由、それより後色々形を變ずる

身

くま

ゆき

あま

や

木の



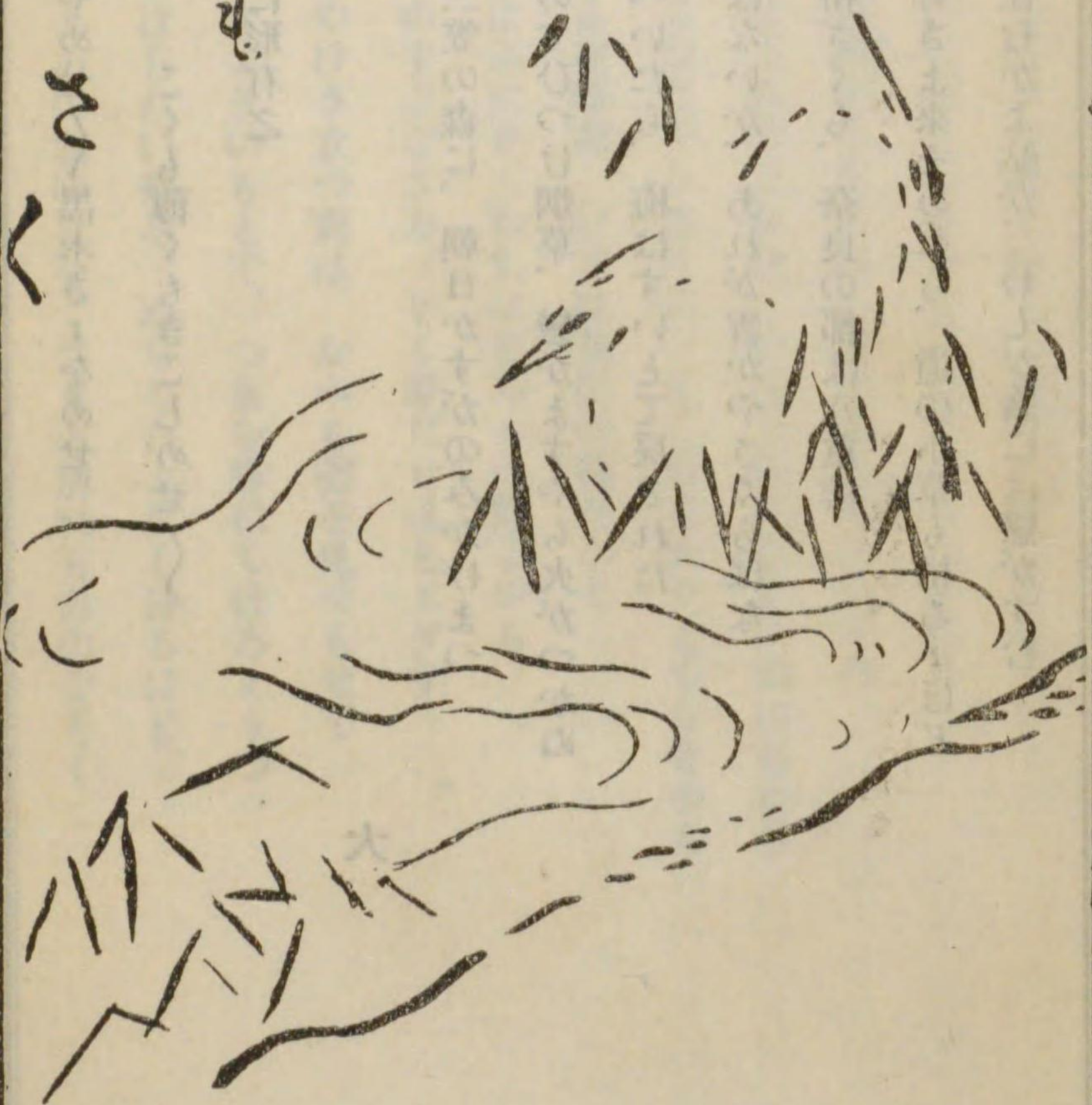
免も

ゆ

うひ

花も

さく



おはら木やめせく、黒木さよをめせ

こくも薄くもきこしめせく

栗本駿河家に形有之

大

和

- ▲千代の松がえ三笠の森に、朝日かすがのみかけまつ
- ▲さまのいとまのすひつけ烟草、戀がますやら火がつかぬ
- ▲梅と櫻と吉野へいたら、梅はすいとて戻された
- ▲東山のは雪ではないか、あれが雪かやさくらばな
- ▲一に當麻たへまの糸掛ざくら、奈良の都は八重櫻
- ▲ござれそめたらさま來そめたら、道の小草も枯るゝほど
- ▲よしの川には住むかよ鮎が、わしが胸には戀がすむ

戀一鯉にかく

こゆみ一唇の詠

なさけないぞや
一隆達小唄に同
意のものあり

- ▲わしはやまがら餌えさにおとされて、明障子あかりしやうじのうちにすむ
- ▲人に物いや油のしづく、落ちてひろがるどこまでも
- ▲わかいをんなの願ねがひかけるのは、神や佛もをかしかる
- ▲さまにうらみは三島のこゆみ、いうてなにしよに添はぬから
- ▲花のさかりをこなたでしまうた、どこをさかりとくらそやら
- ▲ゆうべ呼んだる花嫁御、けさは無間の鐘をつく
- ▲花は一枝折手そりてはふたり、わしはどちらへ靡よこやら
- ▲ひとり山道ものすごござる、早く聲だせほとよぎす
- ▲なさけないぞやけさ立つ霧は、かへる姿を見せもせで
- ▲雉のめんどりすよきのもとで、つまを尋ねてほろゝうつ
- ▲月夜かけにもほしたい袖を、ぬらしたよ又しほるほど
- ▲さまよあれ見よあの雲ゆきを、さまと別れもあのごとく

山家鳥虫歌

心のまゝ心
まことの行か

- ▲思ひなほしは無いかよさまよ、鳥は古巢へかへらぬか
- ▲人目おもはず人さへいはにや、織りてきしよぞやたつ縞じまを
- ▲そうて添ひ飽くのごもあるに、添はで思ひのますもあり
- ▲お月さまさへこひぞよめさる、こよで待てとの雲かけに
- ▲蝶よこてふよ菜の葉にとまれ、とまりや名がたつ浮名たつ
- ▲はやるかんざし髪かたちより、すぐな心がうつくしい

凡二十五首

山々里々にていひならはすことわざ世の人情父を慕ひ君を敬ひ、宮仕への賤の女なれば主を思ひ子をしたひつまを親む心のまよやさしくも感すべき事也、此國に大峯といふ深山あり、昔遠江國長福寺へ山伏來り、大峯へ入る路用の合力を得んといふ、かねといふは鐘樓より外はなし、路用にたよば參らせんといふ、客僧喜び、鐘をさけて走りのき釋迦が嶽の松にかけ置いて今に存すといふいぶかし、しかれどもかやう

あらぬかぎり云
云一あらんかぎ
りは朽ちもせぬ
の詛
世の中一豊作

の事にしへありし事也、漢の武帝の御時未央殿の鐘故なくしてみづから鳴ること三日夜までやむ事なし、帝驚かせ給ひしに、東方朔奏しけるは、銅は山の子にして山は銅の母と承る、陰陽の氣類をいへば、子と母とは相感すべし、山くづるゝ所ありなんと申しけるに、三日のうち南郡の山くづるゝ事三十餘里とぞ奏しける、今も人家の釜鳴ることあるは此理にてぞ侍る、是等の理をよく通じなば其一氣の感する所は百世と雖も遠からざる事をしるべしと鬼神論に出たり、山伏の鐘を山上へ持ちゆくこと、東方朔に尋ねたらばいかゞ答へん

河内

- ▲君は八千代にいはいふね神の、あらぬかぎりは朽ちもせん
- ▲ことし世の中稻刈りそめて、神と君とにかさね餅
- ▲山家なれどもわがふるさは、柴のいほりもなつかしや
- ▲山家々とあしけにいやる、色のよい花山に咲く

けなりやー淡し
マ

でごとー出るこ
との衍か

ふりてー降ぬ
散りばー散りぎ
は

- ▲親がかたおや御座らぬゆゑに、人もあなづりや身もやせる
- ▲人はけなりや咲く花なれど、われは木蔭こかげのしをれぐさ
- ▲さまとわしとは山吹そだち、花はさけども實はのらぬ
- ▲富士の裾野のひととすよき、いつか穂にでて亂れあふ
- ▲人がいひますこなたの事を、梅やさくらのとりにくくに
- ▲人のいひなし北山時雨、曇なき身は晴れてのく、
- ▲わしは谷水でごとは出たが、岩にせかれておちあはぬ
- ▲何をなけくぞ川ばた柳、水の出ばなを歎くかや
- ▲さつき雨ほど戀ひしのばれて、今は秋田のおとし水
- ▲梅はにほひよ櫻は花よ、人は心よふりいらぬ
- ▲雨のふりでに名が立ちそめて、雨はやめども名はやまぬ
- ▲おもしろいぞや今さく花は、のちの散りばは知らねども

うちごみやなぎ
打込築上の誤
か

一夜おつるはー
「春の夜の妻は」
かりなる手枕に
かひなく立たん
名こそ惜しけ
れ」の意

- ▲人の事かと立ちより聞けば、きけばよしないわしがごと
- ▲阿波の鳴戸に身はしづむとも 君の事ならそむくまい
- ▲こひの山吹なさけのあやめ、秋の枯草しをれぐさ
- ▲さまとわしとはうちごみやなぎ、浮けど沈めどもろともに
- ▲思うてこひして叶はぬ時は、稻の葉むすびして見やれ
- ▲こなた思ふたら是程やせた、ふたへまはりがみへまはる
- ▲一夜おつるはよもやすけれど、身より大事の名がをし
- ▲いとまぢやというて挿櫛さしぐしくれた、心とけとのときぐしを
- ▲あきもあかれもせぬ中なれど、いとまやります親ゆゑに
- ▲鐘が鳴るかや撞木しもくが鳴るか、鐘と撞木のあひが鳴る

凡二十六首

君を敬ひ豊年を祝し、神に祈りて安穩を願ひ、貧しきうちに樂みあはれに聞ゆる、

樂みは―此歌
「樂みは夕顔棚
の下涼み男はて
ら云々」とい
ふが普通なり

はるの松が枝―
濱の松が枝の誤
か

をし鳥―噫にか
けていふ

古歌に樂みははまのひさごの夕涼みをつとはてよら妻はふたのして、御製のよし、
男女ともに心やはらかにて詞うつくしくあれども、國の癖としてことをはかる心多
しといふ、大和河内の境に二上山ふたかみやまといふあり、麓に雲母きらら多くあり、雲母は水氣にて
此山に霧たちのほりて雲合へば雨ふる故に、二上山に雲集れば雨ふると所の者いふ
は陰陽相和し同氣求むる故なり、雲母と書くは此故なり、相感する事は前にいづる

和 泉

- ▲千とせにあまるしるしとて、君が世をへるはるの松がえ
- ▲こなた百までわしや九十九まで、髪に白髪のはゆるまで
- ▲ひよくくと鳴くは鶉ひよこ、鳴かぬは池の友にをし鳥つれてゆく
- ▲七つさがりて田の草とれば、のばの露かや涙かや
- ▲聲はすれども姿は見えぬ、君はみやまのきりくす
- ▲さまはけなりや細糸つむぐ、わしは山家のふしつむぐ

人はわるない―
此唄隆達小唄に
もあり
のばた―野端か

たがへす―耕す

お前ついでしよ―
人前ばかりの追
従
お茶をあらしに
茶を食り飲ま
ん爲に

- ▲人はわるないわが身がわるい、やぶれ車でわがわるい
- ▲朝はあさほし夜はまた夜ほし、晝はのばたの水をくむ
- ▲風がものいやことづてしよもの、風は諸國を吹きまはる
- ▲をつとたがへす娘はかせぐ、妻はせどへ出て米かしく
- ▲嫁をかはいがれ嫁こそかよれ、むすめ他國の人の嫁
- ▲紅葉ふむ鹿にくいといへど、戀の文かく筆となる
- ▲尋ねてござれ戀しくば、わしは信田しのだの森にすむ
- ▲月夜うたてや闇ならよかる、待たぬ夜にきてかどにたつ
- ▲さまに貰うた根付のかどみ、見れば戀ますおもひ増す
- ▲後世ごせをねがやれぢさまやばさま、年寄こいと鳥がなく
- ▲落ちよくくとおとそとしやる、猿の木さるのきのほり落ちやせまい
- ▲お前ついでしよか人事ひにこいふか、お茶をあらしに又來たか

と一えつと又
はやつとなどの
意にて甚しくの

▲松が殿御で子をうめばこそ、山に小松がたえませぬ

▲嫁をくくとゑと誚りやんな、誚る我子も人のよめ

▲むかし思へば恨めしござる、なぜにむかしは今ないぞ

凡二十一首

▲長き世の松を慕ひ豊年を喜び、友白髪の有様池のをし鳥の睦じきを眺め、うれしき世にあふ事は、淀の流れの車たえせぬ古事思ひ出られてをかし、民の風うはべうつくしくおとなしと雖も、實義うすき所といふ、此國堺の寺に白犬あり、勤行の時堂の椽に來り平伏する事年あり、餅を咽につめて死す、和尚憐みて弔ひぬ、或夜僧の夢に彼の犬來りて念佛の功力により、門番人の妻にやどると見しが男子を生めり、出家させ異名を白犬とよぶ、やすからず思ひて和尚に問ふ、餅を嫌ふ故にといへば、然らば食すべしといひて、用ある體にて座を去り行方しらすとなり、佛説に過去現在在の事をいふ、天地の間一元氣にして五行あつまりて物を生ず、死しては散じ散じ

よて一よくて

▲ては集る、前生は人あるひは犬猿のれいとかたよりありて、生をかへんや、かくあれば天地生々してやまざる事はいかならん

攝 津

▲ことし世がよて穂に穂がさいて、殿も百姓もうれしかる

▲おやはこの世の油のひかり、親がござらにやひかりない

▲人はけなりや親さまふたり、わしは入日の親ひとり

▲親といふ字を繪にかいてなりと、肌のまもりと拜みたや

▲歌のかへしは二度こそかへせ、三度かへすはいなものよ

▲山を通ればいばらがとめる、いばら放しやれ日が暮れる

▲いとしかはい子に旅させ親よ、ういもつらいも旅でしる

▲心短氣でわしや國をでて、今は習はぬ職をする

▲はんきをなごに心をおきやれ、どこのいづくでかたろやら

はんきをなご一
半季雇の女

いやくづになる
一言へば唇にな
る

うらー浦、裏

れんじー榴子

- ▲腹の立つとき裏に川ほしや、水に心をすよぎたや
- ▲鳥も通はぬみやまの奥に、すめば都ぢやのよ殿よ
- ▲野でも山でもお主しゅさまよかれ、お主のおかげで世に出づる
- ▲物をいやるないやくづになる、いはで包めばくづもない
- ▲人をつかはど川の瀬を見やれ、浅い瀬にこそ藻がとまる
- ▲おれをいふとて隣をおしやる、濱の松風うらをきけ
- ▲夢になりともあはせてたもれ、夢に浮名は立ちやせまい
- ▲さまがわるいかわがあしかるか、ねたむ心はすがの根か
- ▲思うてござるか思はでくるか、おれが心をひいて見るか
- ▲お臺所のれんじの窓に、月と書いたはまことかや
- ▲胸でくるしき火はたくけれど、けぶり立たねば人しらぬ
- ▲雨のふりでに名が立ちそめて、雨はやめども名はやまぬ

わがいやかー我
を厭ふか

凡二十二首

- ▲浮名たよしてなぜ君はそはぬ、人がさますかわがいやか
- 千世を祝ひ孝弟の道ありて言ひ出すこと義に叶うて情ありといへども、國富み華美を好む故にや、心さま人を怨み身をかこつ事も勢強くをとなしからざる姿あれども、よきにすよめなしたらば義ある國といふべし、此國東成郡林寺村といふ所に、鳥虫の類石の上にとまれば、いたどき二つにわけて口を開きおとし入れて又もとの如し、蛙の物を呑むに似たり、よつて蛙石といふなり、又河條國金遼山の廟に龜石あり、人食につきぬれば、此石に向ひ禮をなせば飲食悉く出すと、三才圖繪に出たり、蛙石は物をのむ、龜石はこくを吐く、一氣なるによりさもありません、いぶかしくて或人林寺村へ行き尋ねしに、人家の藪中に蛙石あり、いにしへは口をあけしよし、今は其事なしといへり

伊 賀

見ずとー見ずと
も
藤一有馬に藤と
いふ湯女ありて
有名なりき

▲千代も長かれこの君の、老木の松は榮えゆく
▲他國へだてと海山うみやまこえて、見ずと心はかはるまい
▲松になりたや有馬の松に、藤にまかれてねとござる
▲咲いた櫻になぜ駒つなく、駒がいさめば花がちる
▲をさななじみに離れたをりは、沖の櫓うか權が折れたよな
▲ねたらよござる青田の中で、ねたら花さく實ものりて
▲つばめも軒の住家にかへる、君は何故かへらぬぞ
▲見れども見えぬ沖の船、こち吹く空をねやにまつ
▲小石小川に子がすてとある、ひろうてそだてと花がさく
凡九首
伊 勢
▲かけてよいのは衣いか桁かたに小袖、かけてたもるなうすなさけヤアレヤレく

わかれー和御寮

▲勤めすりやとてわかれのやうな、やほの酌すりや足もする
▲鳥羽でさく花ヤレ女郎は大坂の新町にヤレヤレく、酒は酒やに茶は茶やにヤレヤレく
▲心中しましよか髪きりましよかヤレ髪ははえもの身は大事ヤレヤレく、お月夜か闇の夜に
▲駒のやせたに高荷をつけて是こでおりよかよ鈴鹿の山を、立しかも月夜か闇の夜に
凡五首
志 摩
▲今朝のうの字は嬉しのうの字、きゆるまもなきうのかどみ
▲思ひ切らしやれもう泣かしやんな、さまの戀路はうすござる
▲曇らば曇れ箱根山、はれたとてお江戸が見ゆるでもなし
▲つとめしようとも子もりはいやよ、お主しゅにやしかられ子にやせがまれて、あひに無き
名を立てらるよ
▲顔をけがすはおしろいか、生れながらの山櫻

あひにー其間に

凡五首

才の神―道祖神

志摩の國いにしへは伊勢と同國なり、伊賀の國風伊勢と同じ、婦人のかたち山城と伊勢を第一とするなり、伊勢のくほたとむく本の中に錢かけ松といふあり、參宮する人此野の長きにあきて、行程何程あると問ふ、里人戯れて豊國野へは十日に餘るといふに呆れて、壹貫文の錢を松が枝にかけて太神宮を拜し、國へ歸る、他の人彼の錢を見るに、蛇のわだかまるやうに思ひ、神靈ありと恐れて取る人なしといふ、此類漢の世に蘆浦といふ所を過ぎし人の何となくわらぐつを樹の枝にかけて過ぐる、あとより來る人又始め過ぎし人の如く掛く、後には幾百といふ事を知らず、何者の戯れにや草鞋大王と名を題して、後には終に御社を立てしと也、これらの類淫祀と云うて蛇狐狸のたぐひを祭ること、和漢とも多くあるなり、父母の氣は即ち天地の氣にして、人體をうけ得て何ぞ故なき淫祀を敬ふ事やある、國々往來の樹にわらぐつをかけ、才の神といひて旅行無難を祈る、此類か

尾

張

ひさごくづや
瓢を這はせたる
草屋

- ▲萱も刈りたし麥かりとりて、羽織したてゝ親も子も
- ▲をなごすきなら八丈へ行きやれ、八丈むかしは女護の島
- ▲ひさごくづやに蚊遣をたきて、綾や錦とゆふすどみ
- ▲さんしよ胡椒より辛い物せたい、ならぬ世帯は尙辛い
- ▲心きよきぞ水鏡みやれ、濁る心はなきものよ
- ▲江戸にさく花駿河でつほむ、ことにお江戸は花ざかり

凡六首

國風實義ありさわやかにしてよき風なり、此國中島郡國府の宮に毎年直會祭といふあり、往來の人を一人捕へる故に、其日は外へ出ずといへども、自然ととられる者あり、人形を作りて其人のかはりとして、まな板の上にするてかたはらに人を置き、翌朝神前より追ひ放し倒れたる處にもちを納めて塚をつき、其人は我家にかへす、

之を考ふるに昔大蛇ありて人を呑む、いけにへを納むれば外に祟をなさずといふ事ありて、淫祀を祭るあやまちより起りて、後世そのまねをすと思へり、近年は國君の命ありて此祭をとどめ給ふのよし、大智の君といふべし

三河

▲さまの心はなげうすくなる、ことは八橋かきつばた

▲あかぬ故里ふるさとふりすてよ、たれがためかや君ゆるゑに

▲柳の糸にとめられて、かへるもならず子がつなく

凡三首

遠江

▲あくればいでて暮るよまで、身は粉になるかはだかむぎ

▲遠州濱松ひろいやうでせまい、よこに車が二挺にちやうたよぬ

▲君はこがらすわれはまた尾羽をからすのはねばたき

こがらすこがらす小
鳥焦れさす
からすからす小
鳥

かへるかへる一一歸歸蛙

凡三首

三河遠江とも虚談少く、女もけなけに恥を知る風といふ、大井川による堤の陰に忍びて見れば、鳶の如きもの來り魚をとる、人音すれば去る、俗に木の葉天狗といふ、考ふるに夜鷹なるべし、夜川面に出て蝙蝠虫魚などをとる、すべての事我心既に惑ひぬれば神も亦くらし、神くらきが故に物に惑ふ事あり、たとへば目を患へる者の空中の花を見るが如し、これを玄花黒花といふ、孔子曰、人の信ずる所のものは目なり、眼もまた信するに足らざる事あるかと宣ひしは、かゝる事にて見あやまつ事多くありと鬼神論に出たり、又晉の禾廣といふもの常に親しく來る人ありしが、久しく怠りて來らざりしを不審に思ひ問ひければ、以前座敷にて酒を飲みたるに、盃の中に蛇の形あらはれる、高位の賜はる物なれば飲みつくす、是より病に犯さるゝ故來る事疎くなるといふ、壁の上に蛇をゑがきたる弓をかけ置きたり、是故の事にありなと思ひ、又座敷にて酒を勧め盃に物ありやと問へば、以前の如く蛇あり

といふにつき、そのいはれをいふにより、心晴れて病いえたりと也、心の惑ひより起る事しかり

駿河

- ▲ことし世がよて思ふやうに叶ふ、親もよろこぶ身も立ちて
- ▲知つてをれども人にまた問うて、母のさしづで迎ひとれ
- ▲さまのやうなく瓢箪男川へ流して鯨とかたりや

凡三首

遠州と同じきうち取締りなき風といふ、此國富士へ登る事九里、信州淺間の嶽は凡八里あるといふ事いぶかし、いづれか其山の麓なるや、又は谷峯をこえ行くまがりも知れず、諸國土地の高きありひきとあり、信州は本朝第一の土地高き所なり、富士海へ近き故山のもとといふ事大概知らるべし、山の本は海より量れば知らるべし、四海くほかなる土地に水たまるを海として、異國本朝高下ひとし、天文書に雖大山

- ▲不過六六丈とあり六六は三百六十丈なり生物草木のかす三百六十を限とす、土地は圓體なるにより、東の山へ登り西の山を見れば西ひきし、西の山へ又登り東の山を見れば、東の山ひきし、是土地まどかなる故なり

甲斐

- ▲殿は雨夜の月かけなるか、心もしらぬ行末を
- ▲高い山から谷底見れば、おまんかはいや布さらす
- ▲おれがさらすは布ではないぞ、あだな男の心をさらす

凡三首

伊豆

- ▲こんどござらばもて来てたもれ、伊豆のお山のなぎの葉を
- ▲ゆうべそがくふつたる雨は、虎が涙か風つよし
- ▲じつに添ふなら生爪はなそ、おれは五つの指をきる

そがくー曾我
に掛けていへり

凡三首

相 摸

- ▲大工どのより木びきはにくや、同じ中をばひきわける
- ▲くるか／＼と川下みれば、いぶきよもぎのかげばかり
- ▲つまは萱刈り鎌倉山へ、われは子どもに根芹ねぢつむ

凡三首

武 藏

- ▲都まさりの淺草上野、花の春風おとさえる
- ▲ことはどこぞと船頭衆せんづしゆに問へば、こよは梅若隅田川
- ▲色のよいのは出口の柳、殿にしなへてゆらくと
- ▲いとし殿御を遠くにおけば、烏なくさへ氣にかよる
- ▲わかいをなごに殿御のなひは、笠にしめ緒のない如く

凡五首

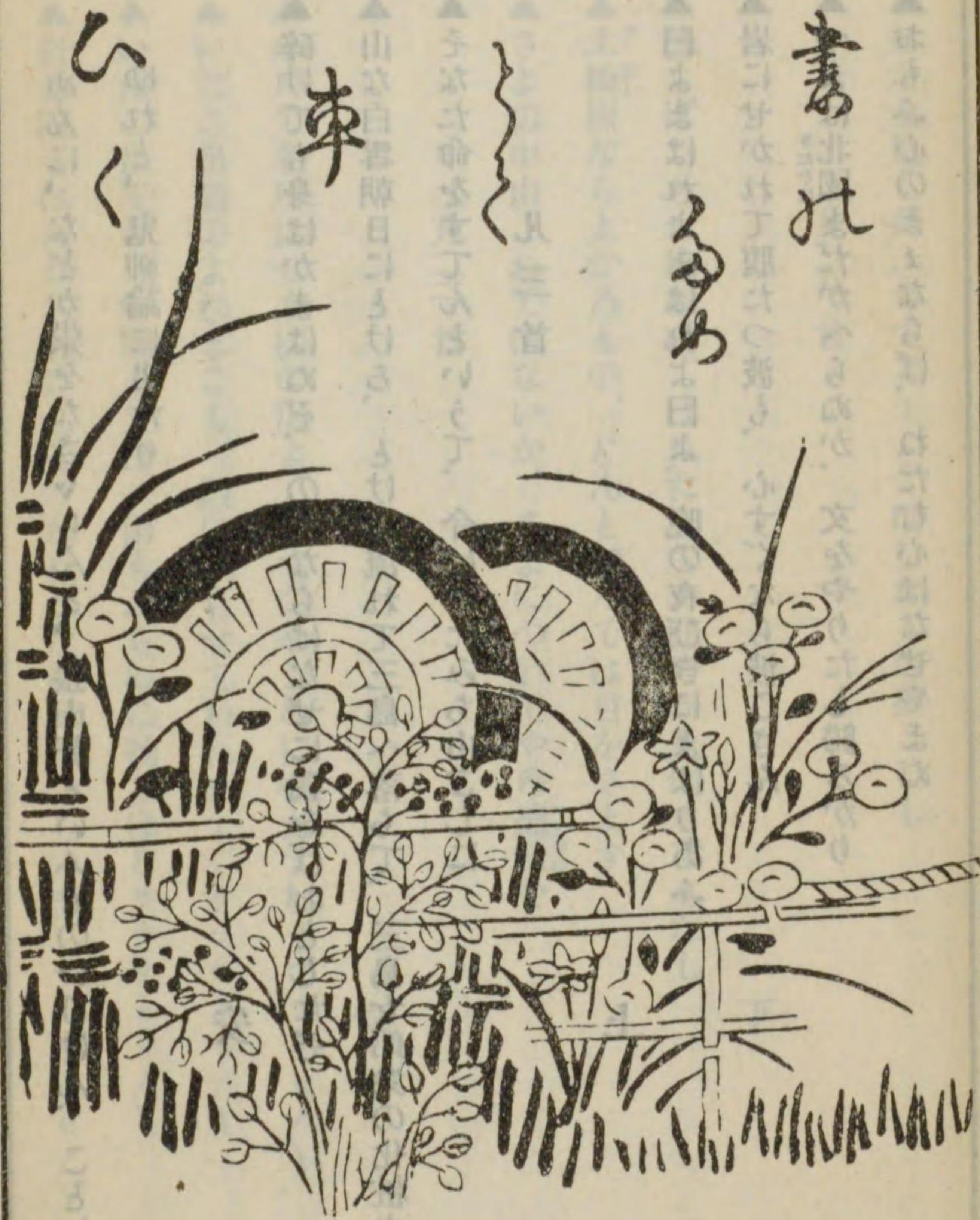
甲斐の國南に富士をおほうて氣こもりするどなり、伊豆の國は氣強くして清き心あり、相摸の國は淫風多き所といふ、武藏の國心廣くおごりの氣ありといふ、此國足立郡大宮の森のうちに黒塚といふありて惡鬼すむ、東光坊といふ山伏鬼を退散せしむるといふ、いにしへは人の來らざる所に塚穴あれば盜賊こもりて、人來れば殺し衣類を剥ぎとる類を鬼といふ、然らざれば山川木石水土の怪に過ぐべからず、山深く水暗く草木おひしける所は日月の光及ばざれば、陰陽の氣自ら鬱して百怪を生ずる事は、いはゆる蒸してくさびらを生ずるが如し、これらの類に苦めらるゝ事はさくる事を知らず、みづから恐れる所なり、晉の溫嶠といふ人牛渚といふ淵に舟をとどめて此所に水深く集る所と聞きて火をもやして照らすに、さまざまの怪しきものに水に浮み出てにけ去りぬ、深山大澤はかれがいるべき所なるを、人のきて之をしづ

けいご
様ご



娘と

てめ



書れ

車

ひく

めん、などか崇をなさゝらんと、張南軒といふものいひけん、ことわりにごそ覺ゆれと、鬼神論に出たり

山な—山なる

- ▲砕けても身はかまはぬぞ、のくならばなぜに我をばおとしたぞ
- ▲山な白雪朝日にとける、とけて流れて三島へ落ちて、三島女郎衆の化粧水
- ▲そなた命をすてんというて、今はふたみち山ごしに

凡三首

- ▲白よまはれよまはれよ白よ、晩の夜びきにまはりあふ
- ▲岩にせかれて腹たつ波も、心すぐなら波こさん
- ▲つまは北國^{きたくに}まだかへらぬか、文をやりたし歸るかり
- ▲おもふ心のまよならば、ねたむ心はなぜやまぬ

上

總

安

房

- ▲むかし見し夢ふりすてよ、今はむかしの夢こひし

凡五首

- ▲曇らばくもれ箱根山、はれたとてお江戸が見ゆるでもなし
- ▲土橋板^{はし}ならよかるもの、どんと踏んでは目をさます
- ▲さよの中山これではないか、さまについてやる撞鐘^{つぎかね}を

凡三首

- ▲水戸で名所はせんばの川よ、はすのめぐめに鴨がすむサツサオセく
- ▲いたこ出島のよれまこも、殿に刈らせてわれさよぐサツサオセく
- ▲いたこ出でから牛堀までは、雨もふらぬに袖しほるサツサオセく
- ▲岩井町とはたが名付けしぞ、かねがなければつらいまちサツサオセく

下

總

常

陸

め—根の事(旁註)
いたこ、岩井町—遊女町(旁註)
よれまこも—よれもつれたる眞

凡四首

湖一ニケ所とも
潮の誤なるべし

いまきりたけ
今切り竹か

- ▲安房の國は心するどなり、上總の國安房と同じ、下總の國は上總と同じ、山沼流水多き所なり、常陸の國風氣よろしからず、病をもつて死せざるをほまれとする風なり、此國息栖明神のいそ海に女瓶男瓶といふ二つの石あり 中は素水にてしほの味ひなし、忍鹽井の水といふよし、素水なる事はかろくして湖はおもし、海中きりのほるが如く、彼の石の中の水は砂ごしをするが如し、然れども山上に水あり、海なき國の山に湖の出る所あり、石中に潮わく所あり、これらは山澤氣を通ずる故に、一氣そのまゝ通ずなり
- ▲年たち返る御代の春、松の緑の千代を待つ
- ▲伊勢の山田のいまきりたけは、お杉お玉のさよら竹
- ▲堅田船頭を夫にはいやよ、月に二十日は沖に住む

近

江

▲何も職ちやが鞍馬の職は馬に七束我身に二束、馬の手綱を手にひきまといひ花の都へ柴賣りに

▲わしが殿御は明日から江戸へ、足も輕かれ天氣もよかれ、とまりくゝに女郎なかれ
▲大田原見たか江戸見たか、大田原町はまだ知らぬ、お江戸に弓が千挺立つ、弦引くとはわがつまか

凡六首

美

濃

- ▲松になりたや有馬の松に、藤にまかれてねとござる
- ▲浅香山かや山の井の、人の心の底みゆる
- ▲底の見ゆるはたれが知る、深い中とはみとせまで
- ▲海がないとや此國に、舟も帆もある高瀬舟
- ▲高瀬舟には柴をつむ、われは浮名の種をつむ

浅香山云々
一浅香山影さへ
見ゆる山の井の
浅き心はわがも
はなくに」の意

凡五首

燒石の如くもの
—如きものの誤
なるべし

近江の國風詞やはらかにして善をえらぶ心あり、美濃の國心やはらかにしてよき風
 なり、此國月吉村といふ所に長さ一二寸ばかりある薄白き寶貝はうかいの如き月糞といふ石
 あり、同所村田の邊に星糞といふものあり、上天の星は末代かはらず、流星は地中
 より出づる陽氣にて空へあがり、冷際といふ大寒の所あるにあたり、すれて光を發
 し落つるものを流星と名づけいふなり、土中の陽なるゆる土氣をふくみのほる、大
 なる流星は地まで火光とぞく、ともし火のしんあるが如く、陽は發し土氣はかたま
 りて黒き燒石の如くもの地へ落つる、これを星糞といふなれば、岩村に限りてある
 とはいぶかし

▲佐渡と越後は筋向ひ、橋をかきよやれ船橋を

▲橋の下には鶉の鳥が鳴くぞや、何と鳴くエよぶりしやりと

飛 驒

▲おまんの部屋で鳥せみが鳴くいノッ何と鳴くヤアつまこい〜と三聲鳴く

凡三首

信

濃

見たさい—見た
さはの誤か

▲嬉しめでたの若殿さまよ、知行まします程なしに

▲逢ひた見たさい飛びたつ如く、籠の鳥かやうらめしや

▲籠の鳥ではわしやござらねど、親が出さねば籠の鳥

凡三首

飛驒の國の人の心せばし、他にもるゝ氣なき故なり、信濃の國心すこやかなる風な
 り、此國或寺に猫あり、世にいふねこまたなり、商人來りて所望しかへり、我家に惡鼠
 ありて猫をくひ殺す事度々の事なり、彼の猫を合せければ、鼠をくらふ、鼠又猫を
 くらひて二つのけもの死しけるとなり、昔夫子陳蔡の間に苦ませ給ひし時、夜に入





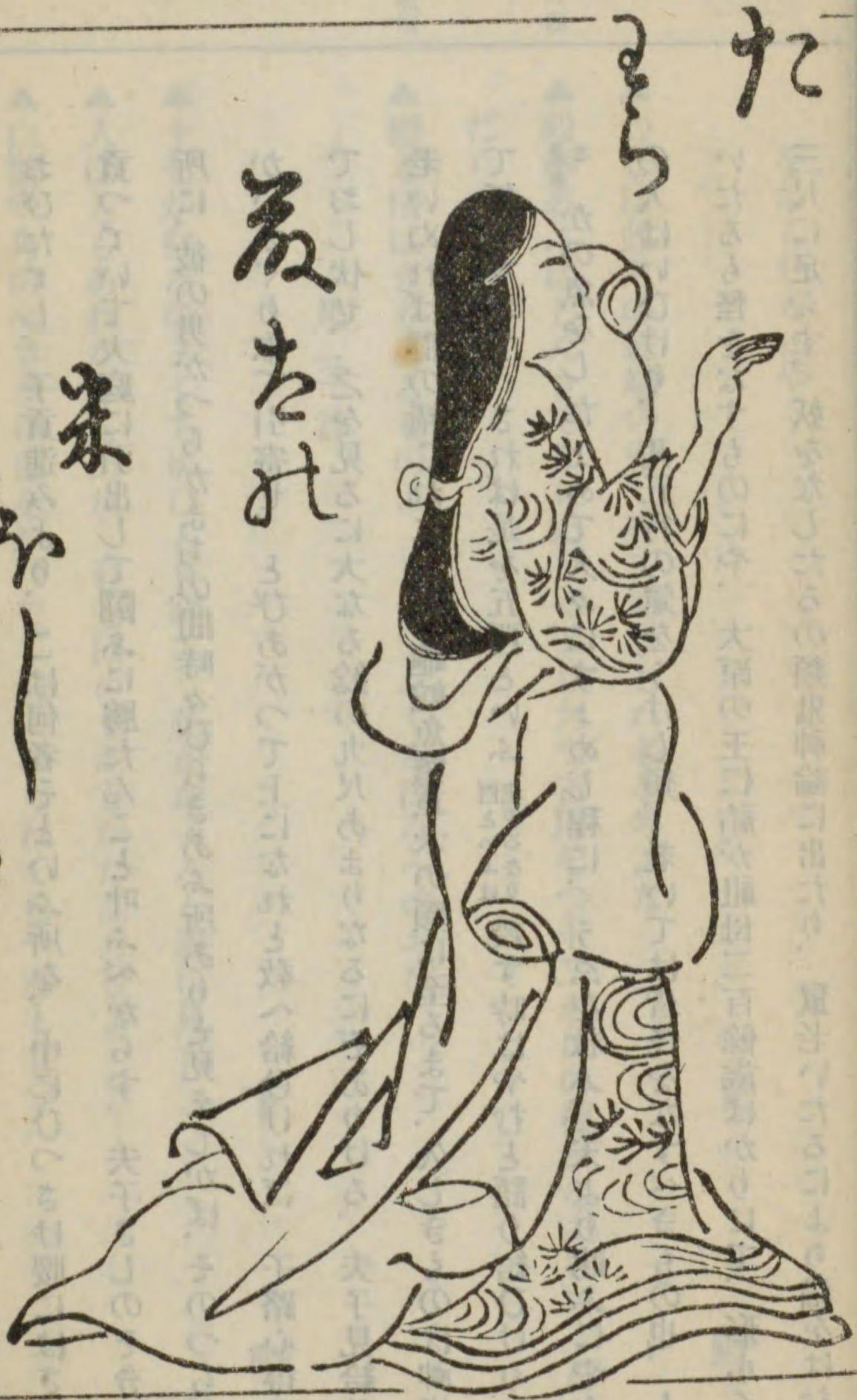
秋も

むを

を

射

うら



た

ま

夏をれ

来

か

か

りて身のたけ九尺ばかりの男黒き衣に冠著たるがつつと入り來りて、聲をあぐる事
 おびたどし、子貢進みより、こは何者ぞといふ所を、中にひつさけ腰にはさむ、子
 貢つゞいて大庭に引出して鬪ふに勝たんこと叶ふべからず、夫子さしのぞき見給ふ
 所に、彼の男がつらがまちの間時々ひらきあふ所ありと見えしかば、そのつらがまち
 かいさぐり取て引寄せ、とびあがつて上になれと教へ給ひければ、子路心得てくん
 でおし伏せ、之を見るに大なる鯰の九尺あまりなるにぞありける、夫子見給ひて物
 老いぬれば群の精これによる、龜蛇魚鼈草木の類に至るまで、久しきものは神皆より
 て妖怪をなす、されば是を五酉といふ酉といふは老ゆるなり殺す時はやむと語り給ひけり搜神記術波傳等に
見ゆかの魚をしたよめて人々にすよめし程に、うゑを救ふ、天より賜ふにやと後世
 の人はいひけり、凡五行の氣をうけし類、老いては皆怪をなすべきもの也、人の老
 いたるも怪をなすものにや、大原の王仁祐が祖母二百餘歳ばかりにて、形小くなり
 三尺に足らず、妖をなしたるの類鬼神論に出たり、鼠老いたるにより猫をはむの妖

をなしたるにや

野

▲わしは此町の軒端の雀、聲で聞きしれ名を呼ぶな

▲殿御忍ぶはしんきでならぬ、くどり九つ古川七つ十二小口の榎戸をあけて、忍びこん

だら夜が明けた

▲戀と情はきりあるものよ、したでおくるはみへのおび

▲凡三首

下野

▲十七かむろのこぐちにひとり寢て、花がかよると夢に見た

▲人はともあれかくもあれ、わしはめじかとかたならびよ

▲白鷺や舟のへさきに巢をかけて、波にゆられてしやんと立つ

▲凡三首

榎戸！板戸の誤
なるべし

戀と情！此歌解
し難し

いへらんーいら
への誤か

くも、こいー原
本は是等の旁點
に各差別をなし
たるもさして要
なければ略す

上野の國は物に臆する事なき風也、軒端の雀といひしにより、かくとだにえやは伊吹のさしも草とよみし實方朝臣は行成と同じ時の殿上人にて、口論をし行成の冠を笏にておとされしを、さらぬ體にて冠を著、色をそこなはずして、是はいかなる故に亂冠にあひ候ふやらんと申されければ、實方いへらんかたなくしらけて立たれけり、主上此事をひそかに御覽せられて、實方を陸奥の守になして遣され、終に召し還されずして國に卒す、歸洛せん事を願ひて、今一たび臺盤のいひをくはどやと言はれけり、其後實方雀とて、殿上の臺盤のあたりに必ず雀ありけりと言ひ傳へたりと百人首の抄にあり、其後歌の會席にてこけたる殿人ありしを若き人笑ひしに、年若いてこけるを笑ふ人々の命長かれ思ひしらせんと讀みし人もあるに、歌道をたしなみ學問する人のつよしみ第一なるべし、下野陸奥は詞訛多しといふ、なまるといふ事五音四聲のわかちを知る時はなきはずなるを、四聲の考なくして、妄に詞を使ふ故なり、此國に限らず諸國とも四聲の分ちをいへば、雲はくも蜘蛛はくも戀はこい鯉

はこい海人はあま尼はあま此平上去入の事を心得る時は皆分つ事なれば、みづから知るべき事なり、五畿内の人音の事を學ぶにあらず、都に近きゆゑ、よき音を自然と小兒より聞きおほゆる故なり

陸 奥

▲橋のぎんほしを五兵衛かとおもつて、既に詞をかきようとしたが、さんしよくて見て胡椒くて見れば、いとこどしやら、にてからい、さんしよのせい

▲秋風が吹けばいの、秋風がふけばサ豆の葉もかれるいの、豆の葉もかれるサ枯れたが大事か、なんとしよ、さんしよのせい

▲あのむら千鳥つらくやサわれをつれてはなぜ行かぬ、つれて行たら殿御にあうてサわしが心の底うちたよき、見すてられたら島國へ、さんしよのせい

凡三首

出 羽

ぎんほしーぎば
うしの事(旁註)
くてー食うて
さんしよのせい
ーはやし詞



よられゆられ
る事(旁註)

▲橋のらんかんに腰をかけ 沖をはるかにながむれに、沖の鷗が三つつれて又三つつれてむつまじくよられながらも君戀し、さんしよのせい

▲明くればいでて暮るゝまで、辛苦するのはたがためなるや、末をとけんと思ひつめ、身は粉になるとかまはぬに、つれないことばいかゞせん、さんしよのせい

凡二一首

陸奥出羽の風俗民家に子をぶつかへすというて、三歳の比父母これをくびり殺す。人これを怪ます、夷狄の如くありしに、仁風及び今其事なしといふ、陸奥の國或村に古塚のありしを、其里の者畑地にせんとしてあばきしに、大きな郭くわくを掘り出しあけて見れば、錦の直垂に鎧甲に太刀をはき、そのさま七十歳ばかりなる老人と相見え生けるが如し、所の役所へ訴へ見分をうけ、吟味の處姓名かつてなし、定めて秀衡にてもありなんとて、今その所に社を建て祭りありしとなり、納めやうにより數百

▲年を経ても損ぜざる納めかた有る事は古書にくはし

上 卷 終

山家鳥虫歌 卷之下

- ▲松より巢だつ鶴の子の、千とせは君と親のかけ
- ▲はしる舟をも招けば磯へ、よるは心のまことなり
- ▲よそに思ひし昨日のあやめ、けふは我家のつまとなる
- ▲むかし竹馬老いては末の杖となりたるおやぢさま

凡四首

- ▲山かけやいがらし川の流れには、みやまの奥のきよのみづ
- ▲月の夜にさへおくりをもらうて、見すてられたら闇の夜に
- ▲思うて来たのに水かけられて、わしが思ひを水にしやる

越

前

若

狭

見すてられたら
一本に「見す
てられたよ」と
あるよろし

かひしやう一甲
斐性
ひつ一米櫃の意

わしやれ一蒸さ
れ

よろもよも一上
くもく

- ▲相性みよよりかひしやう見やれ、小鬘なでうよりひつなでうよ
- ▲しんきくが三つ四つござる、語るしんきに語らぬしんき、一つ枕に寝ないしんき

凡五首

- ▲をさまる世のうれしさは、稻穂さかえる秋の水
- ▲里のあたゝまりでむしやれてくらしや、われらはみ山の蟬のこゑ
- ▲けふかあすかと朝日を待つに、つひに曇りて日をくらす
- ▲さまは流れの瓢箪男、ぬらりくらりはようもよも
- ▲みやま六月布子を著るは、金がないから冷ゆるやら

加

賀

凡五首

- ▲親子草とは年ごとに古葉ゆづりのわかばかや

能

登

▲きどす野にすむ雲雀は山に、鶉粟穂につまおもひ
 ▲飲みやれうたやれさきの世は闇よ、今は半の花ざかり
 ▲沖の戸中の三本竹は、うます竹やら子かさかぬ

凡四首

越 中

▲よろづ世をへる音なしの、瀧の流れはよもつきじ
 ▲あゆは瀬につく鳥は木にとまる、人は情のしたにすむ
 ▲死んで又くる釋迦の身がほしや、見しよものつらあてに
 ▲買うてくりやれよねばるのを一兩、ごまの油でけがふさん

凡四首

越 後

▲老いせぬ千代の松さかや、谷間の岩に龜あそぶ

見しよものー見
 せよもの
 ねばるー油の濃
 厚なるをいふ
 けがふさんー毛
 がふえんの意か

しんがー心外
 にて残念なもの
 意
 こめいことーこ
 いといふこと

▲わしが思ふとて戸板に豆ぢや、なまじ言はぬがましぢやもの
 ▲千里はしるやうな虎の子がほしや、やるぞ此文江戸までも
 ▲いとし殿御のしんが田がわれた、夕立俄にこめいこと
 ▲月夜鳥は迷うても鳴くが、わしがしんじつ思ふでもなし

凡五首

佐 渡

▲佐渡と越後はすぢむかひ、橋をかけたや船橋を
 ▲さまは釣竿わしや池の鮒、つられながらもおもしろい
 ▲いとし殿御にあひたいことは、川のまなごで限りない
 ▲雉のめん鳥奥山さして松のしんばのつよばみに
 ▲池の子鮒に心をくれて立ちやかねたる白鷺よ

凡五首

まなごーまなご
 の事(旁注)
 しんばー新葉
 つよばみーえび
 みの事(旁注)

▲稲の葉むすび思ふこと叶ふ、末は鶴龜五葉の松

▲わしが事かや志賀唐崎の、一つ松とはたよりなや

▲谷の小藪に雀はとまる、とめてとまらぬ色の道

▲雨はふれく雪ふるな、忍ぶ細道竹たわむ

▲梅やさくらは七重も八重も、なぜに野菊は一重咲

凡五首

丹 後

▲わしとおまへは小藪の小梅、なるも落つるも人しらぬ

▲岩のしみづは底から湧くが、さまの心も底からか

▲月は東にすばるは西に、いとし殿御はまんなかに

▲人はけなりや両手に花を、わしも片手に花ほしや

すばる一昴星

▲きのふや今日までみづしの女、今は二ヶ所の倉のぬし

▲丹後田處よい米どころ、娘やりたや掣ほしや

凡六首

但 馬

▲親は子というて尋ねもするが、親をたづねる子は稀な

▲ひさごくづやに蚊遣をたきて、綾や錦とゆふすどみ

▲思案しどころふんべつ處、親の意見もきよどころ

▲與作丹波の馬追なれど、今はお江戸のかたなさし

▲與作おもへば照る日も曇る、關の小萬がなみだあめか

▲雨はふるとも身はぬりやせまい、さまの情を笠にきて

▲みやこくとわしつれて来て、こよが都か山中を

凡七首

ぬりやぬれは

おなれと一未詳
なよな一はやし
詞

▲つきせぬしるし岩に花、峯の小松のしけりあふ
 ▲あさまよりの小鳥が露にしよほろぬれたやうな、ゆらくと苗をとる露にぬれたよな
 ▲けさきたおなれとがかたびらはなよな、裾も縫はずにきるかたびらはなよな
 ▲ひるま米つくは十二からうすでなよな、嫁も姑も寄つてつきやれよ、十二からうす
 なよな

因 幡

▲お主にやいとま取りあの山こえて、都まさりの親里へ
 ▲後世と契りて今又あきやる、釘をうちたや後のつま

凡六首

伯 耆

太平顔一おはへ
いがは

▲心かよはす杓子のさきで、言はず語らず目でしらす
 ▲金の威光の太平顔も、きのふかぎりのさんづ川

打たしやる一原
本うたせうと
あり一本により
改む
おしるのみ一御
汁の實

▲ばくち打たしやる大酒のみやる、わしが布機むだにして
 ▲晝間はでかいたが何のをけのみでなよな、いそばたのわかめよしそれがおしるのみで
 なよな

▲そふとめのまたぐらを鳩がにらんだとな、にらんだも道理かや、またに豆をはさんだ
 となよな

凡五首

出 雲

ふかねど一ひか
ねどの訛
ひるまもち一未
詳
かたぶら一かた
びらの訛

▲これの石臼はふかねどもまはる、風の車なら猶よかる
 ▲ひるまもちのござるやう、あかいかたぶらで、ぶらりしやらりと、あかいかたぶらで
 ▲さんまれこれの嫁御さま、どこなそだちのさんまれさまぞ、稻のうらほののぎそだち
 ▲千家北島にやア焼餅がはやる、なかに味噌入れてポッポほやくくと

凡四首

ものも物申、案内

しんこー新粉餅

▲京の大佛に帆柱もたせ、鯨つりたいたい五島浦で

▲關の地藏に振袖させて、奈良の大佛掣にとろ

▲これの親方御繁昌をなさる、奥は琴の音中の間鼓つらみ、かどはものが絶えませぬ

凡三一首

石見 隠岐

▲背せなをたよかれしんこ程はれた、これも恪氣のかたまりか

▲いなしよく〜と思ううちに、太郎が生れていなされぬ

▲われは奥山のさよ小笹、藤にまかれてねとござる

凡三首

播磨

▲池田伊丹の上諸白も、銭がなければ見てとほる

あかたー妻君

だいとー大唐米
か大道か

▲いつか鴻池の米ふみしまひ、播磨灘をば歌でやろ

▲今の若衆は麥わらだすき、一夜かけてはかけずてよ

▲髪を島田にゆはうよりおかた、心島田にもちなされ

▲ござる〜と浮名を立てよ、さまは松風おとばかり

▲思ふ殿御と白ひきすれば、白は手ぐるま中ではる

凡六首

美作

▲十七八はだいとの薬で、打たねど腰がしなやかに

▲まへ田の稻の葉もちのよさは、黄金の露をまきあける

▲又とゆくまい湯原の湯へは、三坂三里がういほどに

▲近江の笠は形がようて著よて、メ緒が長うてきよござるソリヤイノウ

▲どんどと鳴るは大竹さよら、ならぬは七九ござるソリヤイノウ

山家鳥虫歌

凡五首

備前

▲千代に八千代に御代をさまりて、浪も靜に四つの海

▲しあく大工はちよく、まかちよ、おれが木ずるにとまりて女郎まねく

▲ごるや赤坂吉田がなけりや、なんのよしみに江戸がよひ

▲君にあふとて朝水くめば、濁る心かまだあはぬ

▲備前岡山新太郎さまの、江戸へござれば雨がふる、雨ぢやござらぬ、十七八の戀の涙

が雨となる

凡五首

備中

▲つきせぬしるし岩に花、峯の小松のしけりあふ

▲こなた思へば照る日もくもる、さえた月夜が闇となる

ごろ御油の
訛、御油、赤坂、吉
田いづれも遊廓
に名高し

新太郎池田光
政

世間ひろがり内
すほり一彦に外
ひろがりの内す
ほりといふ
ひづる一はこべ
の事か
くさぎ一臭桐
底にくい一本
「底にがい」とあ
り従ふべし

凡五首

備後

▲こちの旦那殿はからかさ育ち、世間ひろがり内すほり

▲こなたお背戸にひづるとたでと、なんのひづるめがたでくと

▲こちの旦那殿くさぎの育ち、うはべうつくし底にくい

▲さかえ久しき松がえの、岩の岸根に波よする

▲江戸へくと木草もなびく、江戸には花咲く實もなりて

▲にくいくはうらの裏、實のにくいは思ひのあまり

▲たとへ火の中水の底、およばぬ中に住むもきみ

▲心短氣な男を持てば、胸に早鐘つくごとく

凡五首

安藝

ごしせんござんせぬ

▲宮と廣島に海がなかよかる、いとし殿御をかよはせはすまい、わしがちよこく通ひ
ましよ

▲渦がまひます廣島の沖に、渦ぢやごしせんゑくほでごしす、おまへとわしが中ぢやも
の

凡二首

周防

▲東風ふきすすさむあしたには、さまの涙か雨のあし

▲ひとよ馴れくこの子が出来て、新茶々壺でこちや知らぬシヨンガへ

▲吉田通れば二階からまねく、しかも鹿の子の振袖がシヨンガへ

▲酒はのまねど酒屋の門で、足がしどろであゆまれぬシヨンガへ

凡四首

長門

こちや此方
粉茶

▲西ふく風の夕ぐれに、思ひいでたよ里ごころ

▲こいというたとて行かれる道か、道は四十餘里夜はいちや

▲戀ぢやせきやるな浮世は車、命ながけりやめぐりあふ

凡三首

紀伊

▲いく千代久し松がえの、君もさかえるわかみどり

▲月になりたやさまが住む、ねやの臥戸を照したや

▲たづねてござれ戀しくば、三輪のふたもともすぎん

▲おもふ殿御が野邊ござるなら、涼し風ふけ雨ふるな

▲山が焼けるがたよぬか雉よ、これがたよりよか子をおきて

▲人にはいはりよと云ひさがさりよと、わしが身にさへくもりなか

▲人の口には戸がたてられぬ、流れ川瀧せきならぬ

三輪の云々二
本杉に共過をか

くもりなか
もりなくば

凡七首

淡

路

▲舟がつくく二百二十七艘、さまが御座るかあの中に

▲丹波雪國つもらぬさきに、つれておでやれ薄雪に

▲しんく島田にけさゆうた髪を、さまがみだしやる是非もない

▲花は折りたし梢は高し、ながめ暮らすや木のもとに

凡四首

阿

波

▲あたけ戀しとさまつた山がよひ、つたのたていし星月夜

▲せまい廣いとわしが寢た部屋を、今はよそめで見てとほる

▲雨がふろとて沖から曇る、娘さろとて聲がこぬ

▲鳥もはらく夜もほのくくと、鐘も鳴ります寺々に

しんく島田―辛
苦して結うた島
田留

娘さる―さるは
離別の意

▲鉦をたよいて佛にならば、江戸のはやがね皆佛

凡五首

讚

岐

▲さまよくとこがれて来たに、さまはおしかよ物いはぬ

▲志度はよいまち西北をうけ、八島おろしはそよくと

▲花のゑじまはからみがあらは、たぐりよしよものみのはらへ

▲人の娘と新造の船は、人が見たがる乗りたがる

▲八島山には大谷小谷、なぜにこなたに子がないぞ

▲みすじふる谷朝さむござる、火燵やりましよ炭そへて

凡六首

伊

豫

▲月はかさなる腹の子はふとる、生木筏できが浮かぬ

き―氣 木

ねいろー根入、
寝入

▲十九はたちで妻つとないならば、ひとりまるねがさびしかろ
 ▲わしは濱松ねいろとすれば、磯の小波がゆりおこす
 ▲おやも兄弟もなき身のはては、ともに情のかけどころ
 ▲闇のまる木橋さまとなら渡る、落ちて流れてさきの世ともに

凡五首

土 佐

苦ー穂の誤か

はをかくすー齒
と葉とにかく
かつら云つらー
いひつらんー
の意

▲田野の山道ま茅は帆はひかぬ、おさや手織のやつもめん
 ▲親にかくしておはぐろつけて、よそにふる雪はをかくす
 ▲ゆつら云つら女房にせうと、つれて他國をしよとゆつら
 ▲さまとわしとは焼野のかづら、蔓は切れても根はきれぬ
 ▲こいといふのに遠いといやる、なんの四十餘里、四百里も心ちかくぞナアレカシ
 ▲戀しゆかしもさまゆゑばかり、逢はぬむかしにナアレカシ

凡七首

筑 前

こまの名物云々
ー博多獨樂と博
多帯とをいふ

花すぎかー一本
「花すぎさ」とあ
り

▲こまの名物博多と聞え、帯にしてさへまはりよい
 ▲生れ來りしいにしへ問へば、君にちぎれと夢に見た
 ▲後家をたてよの身だしなみ、日かけにさける花すきか
 ▲茶ものがたりにひやくこ人事いうて、おのが恥をばのみかくす
 ▲こまの手づなをしりながら、さまに引かれて身をよごす

凡五首

筑 後

▲高みにのこる月影を、宿せし袖はかはるまい
 ▲いかで忘れん逢ひなれて、後世のちぎりもあきの山

しなばかつくる
—しな(嬌態)ば
かりする

てこのぼう—木

- ▲曰はまはさでしなばかつくる、しなでまはるか此白が
- ▲待つがつらいか別れがういか、待つは樂みわかればつらい
- ▲みめがよいとて心が人か、大坂でこのほうでつらばかり

凡五首

豊

前

▲わしとおまへは諸白手樽もろはくて だる 中のよいのは人しらぬ

▲つれて行かんせいづくへなりと、たとへ鹽屋の火をたくとも、おまへ故なら苦し
ない

▲さても見事なみたらひつよじ、晩につほみて夜中よなかにひらく、夜明方にはちりぐくと

凡三首

豊

後

▲後世を願ふはわが身ぢやないぞ、さまをうかめてともしたい

▲金の山吹風そよぐけんな色はんな色はんふく茶にすんふく茶、ちよんきりちよんかい

ろかめて—極樂
淨土に浮かませ
て
そよぐけんな—
そよぐ故に

な

▲さまの痴話文鼠にひかれ、おのれが思ひは穴になる

▲くんくるべいと待つ夜はなくて、待たぬ夜はきて、ちよんきりちよんかいな

▲つくばくわんおんに口鬚がはえたサはえたら大事か、なんとせう、ちよんきりちよん
かいな

凡五首

肥

前

▲けんが弟はヤアレ砂地のごんほ、ねそこほられてあらはれるよゲンコベ

▲藪のなかのきちくばうずは、なじよと鳴くぞ、親がないか子がなにか、親も子もご
ざるけれど、をばごのかたへかたびら一枚かりにいた

▲おまんまたぐらに釣鐘堂が出来て、けふもくれぬかと六つのかねサヨイナア

▲させばおさへるおさへば飲めず、飲めば其身のあだとなるサヨイノウ

ごんほ—牛蒡
きちくばうず
—はたあり虫の

おのれ—一本
「あれ」とあり
くんくるべいと
—来るべしと
つくばくわんお
ん—筑波観音か

丸にやの字元
祿の頃江戸大傳
馬町三丁目丸
屋某といふ廻船
持の官豪ありき
とぞ

とも備後の鞆
せんすろ一仙酔
島なるべし

▲平戸小せどから舟が三艘見ゆる、丸にやの字の帆が見ゆる

凡五首

肥後

▲つまよな池のどんがめならば、くんくるべいヅボンボへ

▲とものむかひのせんする山、は地からはえたか浮島かエ、エ

▲よひに見そめた白齒の娘、ようもなりそな瓜の蔓エ、エ

凡三首

日向

▲月はいみじき闇こそよけれ、忍ぶすがたの顔見えす

▲水にかはづの鳴く聲きけば、過ぎし昔がおもはるよ

▲おもひこがれて飛ぶはたる、ゆふべくくに身をこがす

凡三首

大隅

▲思ひだすとは忘るよからよ、おもひ出さず忘れず

▲幾夜あかしの浦こぐ船も、うかれこがれて磯へよる

凡二首

薩摩

▲闇夜なれども忍ばよ忍べ、伽羅のかをりをしるべにて

▲ちよの前髪おろさばおろせ、わしもとめましよ振袖を

▲洲山^{すやま}おかめ女は洲山の狐、尾ふり尻ふり人をふる

▲ちり行く花は根にかへる、再び花が咲くぢやない

▲志賀唐崎の名はよけれ、一つ松とは聞くさへつらい

▲島が島なら世が世であれば、なんの地かたに身はもとぞヨイコノイカニなんの地かたに身はもとぞ持たう

思ひだすとは
閑吟集に「思ひ
出すとは忘る
か思ひ出さずや
忘れねば」

もとぞ持たう

凡七首

壹 岐

▲ 峯の小松に雛鶴つがひ、谷のながれに龜あそぶ

▲ ござるくくと浮名をたてよ、さまは松風おとばかり

▲ しまうたくく團七どんのさら小麥六把ばかりしまうた、裏のおかめ女とざれあうて

凡三首

對 馬

▲ いらぬ煙管のらうが長うて、さまとねる夜のみじかさよ

▲ 野にも山にも子なきはおきやれ、萬の倉より子は寶

▲ いざやわかい衆ござるまいかよ、晝狐なんのばかさりよ、とんとろばけよ

凡三首

下 卷 大尾

しまうたー小麥
葉をだいなしに
したりとの煮

糸竹初心集

糸竹初心集

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the title '糸竹初心集' and various characters.)

糸竹初心集

世はかぎりなし、事は盡きせずとは、たれかいひけんこれ誠也、まことの道は天の道也、これをまことにするは人の道なりとは、むかし聖の詞也、此誠物と我とになきにはあらず、されども知られず知らず、年をつみ、日をかさねて、頭の雪びんの霜のみ、色をあらそふ事、人みなおなじ、こよに中村宗三といふものあり、幼きより目しひて色をみず、瓶をわるよはひより、理にさとく、耳を以て目とする事、人にすぐれたり、つく杖の土木水石に當る音を手にえて心に得る、しかしより音を聞きて理をしるべき事のあらんを思ひて、琵琶、琴、さみせんに心をつくせり、或時は大森宗君が一節切の調子音律にくはしき事を聞きて、強ひて是をまなび、寢食を忘れてやうやく師に近し、されば友遠方より來りて、又學ぶものあり、かれに對して書き付くるものをみれば、予が眼をうらむる心有て、徒らに書のはしに記すものなり

一 宗佐老人に傳へたるよし、代々いひ傳へたり、然しより宗佐は高瀬備前守につたへ、備前守は三井寺の日光院に傳へ、日光院は安田城長に傳へ、城長は大森宗君に傳へてより、世にひろまり、文祿慶長の比尤盛也、此宗君は、昔は豫州の大森彦七が末孫、勇士武略の後胤也、織田信長公に仕へて、人に名をしらる、信長公逝去し給ひしより、ひたすら隱遁の身となり、霞をあはれみ露をかなしむ觀念ゆゑこととし、尺八の妙音味へ、此道中興の開山となれり、流のすゑをくむ我等まで、遺風ゆゑをしたふといへども、夢にだにもみず、わづかに其かた計りうつして、今書にしるし宗君門弟の外、餘力有て、音ねをしらべんとおもふ人の、一筋となさむとおもふのみ也

糸竹初心集 上卷

先一節切尺八は、其濫觴まちくにて、さだかならず、そのかみ異人有て、宗佐老人に傳へたるよし、代々いひ傳へたり、然しより宗佐は高瀬備前守につたへ、備前守は三井寺の日光院に傳へ、日光院は安田城長に傳へ、城長は大森宗君に傳へてより、世にひろまり、文祿慶長の比尤盛也、此宗君は、昔は豫州の大森彦七が末孫、勇士武略の後胤也、織田信長公に仕へて、人に名をしらる、信長公逝去し給ひしより、ひたすら隱遁の身となり、霞をあはれみ露をかなしむ觀念ゆゑこととし、尺八の妙音味へ、此道中興の開山となれり、流のすゑをくむ我等まで、遺風ゆゑをしたふといへども、夢にだにもみず、わづかに其かた計りうつして、今書にしるし宗君門弟の外、餘力有て、音ねをしらべんとおもふ人の、一筋となさむとおもふのみ也

ほろぼろ一暮露
の字をあつ、こ
の修行者の事つ
れん、草に見ゆ

一虚無僧尺八といふは、長さ一尺八寸に切るゆゑ、尺八といふとぞ、濫觴はたしかに不知、そのかみ由良ゆらの法燈ほつとう此道の祖たるよしといへども、了簡せず、昔よりほろぼろの家に用る物と聞えたり、梵士漢士色おししら梵士などいひしもの、此尺八の執行者しゆぎやうじやと聞えたり、近き比不人ふじんといふこむ僧有て、ごろといふ事を吹出し、その外れんほながし、京れんほ、さむ也井川、よし田などいふさまふの手有之、いづれも律呂りよくの調子にあはせたる物とは聞えず、されども我道にあらざれば、其深き事をしらす

一一節切の尺八切りやうの事、節せつを一つこめ長さ一尺八分に切る故、此名を付くといふ、節より下は七寸、上は三寸八分に切る也、但竹のふとほそによりて、調子違物ちがふものなれば、極めて寸は定らず、筒音つとねを黄鐘わうしきの調子にあはせたる物也、音色は笙のごとく、ゆびづかひは箏うたくちに似たり、歌口うたくちのしめ様は、笛同前也、ゆび遣ゆびぢ廿二あり、笛は惣の穴七にしてゆびのあけさけ百廿八あり、調子は十二より外にあらず、上乙かんちつあるによりて、しらざる人は調子多様に聞ゆる也、筒音は盤渉ばんしやう也、ひちりきは穴の數九つ、ゆびのあけさけ五

百十二あり、これも調子は十二調子より外に非ず、五調子を専らとす、筒音は平調ひやうてう也、簫は竹數十七本あり、一つに一調子づつ切たるもの也、但十二調子より外に非ず、のこりは同音也、竹十七は五行十二支を合せたるもの也、吹きやうの息づかひ内外あり一一節切吹様之事、まづ左の手をうへになし右の手を下になすべし、左の大ゆびにてうらの穴をふさぎ、べにさし指にて二の穴をふさぎ、右の人さしゆびにては、三の穴をふさぎ、べにさしゆびにては、四の穴をふさぐ、一の穴と云ふはおもてのふしのそばなるを云ふ、次を二、次は三、下を四といふ、まへにあけたるをうらといふ、第一おほえずして叶はざる事は、指づかひの名也

一節切惣の穴の音知る事

ふトハ惣の穴をふさぎてふくを云ふ
いトハ惣の穴をあけてふくを云ふ
やトハ一二三四をあけうらばかりふさぎたるを云ふ

ちトハ一をあけ二三四とうらふさぎたるを云ふ
 ほトハ四をあけ一二三とうらふさぎたるを云ふ
 うトハ三四をあけ一二とうらふさぎたるを云ふ
 ゑトハ二三四をあけ一とうらふさぎたるを云ふ
 りトハ二三四とうらあけ一ばかりふさぎたるを云ふ
 ひトハ一とうらあけ二三四ふさぎたるを云ふ
 しやうトハ三四とうらあけ一二ふさぎたるを云ふ
 神トハ四とうらあけ一二三ふさぎたるを云ふ
 たトハ一二四をあけ三とうらふさぎたるを云ふ
 るトハ二四をあけ一三とうらふさぎたるを云ふ
 以上十三字也
 フホウエヤリヒ

上神イタルチ 以上十三

これをよくそらにておほえざれば吹き習ふ事成りがたし 但此内ヤタルこれ三つは二やうに有り

一㊦一三四明うらと二ふさぎたるをやと云ふ

一㊧一と三ふさぎ二と四とうらあけたるをもたと云ふ

一㊨一二四裏をふさぎ三ばかり明けたるをもると云ふ

これは双調の調子、盤渉の調子に、このゆびを用る也、黄鐘平調一越には右のヤタルを吹くべし、よくく心をとめゆびづかひちがへず、空にておほゆべし、惣じて尺八は、

五調子用ひ候へども、まづ歌は一越の調子を專とする也

一一節切證歌

▲やまとをどりのうたふきやう

ホウフホフホウウウウ、エウエウフホウ、エヤリ、ヤヒ上リヤエ、ヤリエウ、エウホウ、よしのよをやまをよ、ゆきかで見れば、ゆきではああらでんよ、やこれの、はなあ

○吉野の山を雪
かと思れば雪で

右にしるすごとく双調と盤渉とは後のやたるを吹くべし

▲双調いせをどり

ホウ、エウ、ホウフ、ホウホフ、ホフヤウ、エヤ、エウ、ホヤエウ、ホウホフ、ホウ
あのきみさまはあ、いせのはまあそだち、めもとにしほがやれこほれかよるゑ

▲黄鐘よしのと山

ヤリエヤエヤリ、ヒリヒリエヤリ、ホウエ、ウエヤリ、エウホ、ウエホ、ヒリヤ
よしのよをやまを、ゆきかとみいれば、ゆきではあああらでんよ、やこれの、はなあ
のふどきよのんよ、やあこれの

▲盤渉よしのと山

リヒヤリヤリヒヒ、神ヒ神ヒヤリヒ、ウエヤ、エヤリヒヤエウ、エヤウホ、ウホフ
よしのよをやまを、ゆきかとみいれば、ゆきにはあああらでんよ、やこれの、はなあ
のふどきよのんよ、やあこれの

▲黄鐘いせをどり

ウエ、ヤエ、ウホ、ウエウホ、リヤエ、ヤヒリヤエヤリヤエウエウホフウエ
あのきみさまはあ、いせのはまあそだち、めもとにしほがやれこほれかよるゑ

▲盤渉いせをどり

エヤヤリヤエウ、エヤエウ、ヒイリヤ、リヒリヤリヒリヤエウ、エヤ
あのきみさまはあ、いせのはまあそだち、めもとにしほがやれこほれかよるゑ

此外五調子の手どもあまた候へども、數おほくこまかなる事に候へば、のせがたし、但
黄鐘のうち、世間によく吹き覺えたる手、少ししるすものなり

▲初手

ウエフエタエフエ、ユ、フエウエ、ヒエフエウエホウルホの手也

▲返

ウ、タエフエ、タウルホ

此手黄鐘卷頭の手なるによりて初手といふ呂也、やはらかにかるく吹くべし

▲安田

タチタチ、ウチタエフエ、フエタウタエ、チタチ、イエウエ、ホウルホ

これより末初手の返しを吹く、此手江州の住 安田と云ふ仁、吹出す手也

▲手巾

ウエフエタエフエ、、、、フエウエ、チタエフエ、フウルホ

▲返初手におなじ

此手江州大津の住、とぎやの佐右衛門二郎吹出す也、刀をとぎける時、此手をおもひ出し、手を拭はで、吹てみるに吹きけるうちに手かわきたり、さるによりて手巾といふ、此手の中にチタエフエ、フウルホと吹くところあり、吹きやうおほし、チタエイ、フウルホとも吹く也、これをぬき手巾と云、日光院吹出さるよ也、又チタエフエウエホウルホ

▲返

ウ、フエフエタウルホと吹く也、これは筒手巾つじゆきんと云ふ、宗佐老人の手也

▲后手

ウエフエタエフエ、、、、フエタイタチタエフエ、チタチ、タエフエ、、、、フエウエ、ヒエフエウエ、ホウルホ

▲返シ初手におなじ

此手は文祿の比、後陽成院の皇后に、糸竹の音に長じ給へるあり、此手を吹きいださせ給ふ、さるによりて后手ごてといふ也

▲ころび

イエフエタチタエフエウタエフエ、、、、フエ、ウ、タエイエ、フウルホ

▲返

ウ、エルタエフエ、タウルホ

此手頓阿彌吹出す、返しの一の息いきにころぶゆび有り、他流には頓ころびとも云ふ也

▲小兒

イエイフエ、タイ、エウエルホ、フエ、、、フエタウタエ、チタチ、エフエウタチ
イエウエ、ホウルホ

▲返初手におなじ

此手は門阿彌吹出す也、ある山寺の小兒こちに戀慕して吹きし手也、さらば明日まるらんと

如此に吹て其後、一越の手にても又歌にても吹くべし、何も如此に音取ある也

▲平調呂の音取

エホホウホホ、エイエイエホエ

▲同律の音取

イエフエエウ、タイタエフエ

▲双調呂の音取

ヤウホウルフ、フウホフヤ

▲同律の音取

イヤフヤヤ、タヒタヤフヤ

▲黄鐘呂の音取

ウエウ、チタウルホ

▲同律音取

ヤヤチリヤエエ、ヤエルホ、フエチリチ

▲盤涉呂の音取

エヤエ、ヒタエヤウ、ホフエウホ、

▲同律音取

リリヒイリヤヤ、リヤエウ、ホフエウホ

右いづれも、調子吹く時、まづ此音取吹かざれば、調子かはりてうつらぬ物也、此外音

取あまた候へども、数さだまらず

宗君流の書物に傳る手の数は

黄鐘廿三 盤涉十六 一越十五 平調十三 双調十一

此外さらばの音取、またときかへしみだれ、戀の音取かんのゆりなどは、宗君一子相傳の所なり

糸竹初心集 中卷

琴の次第の事

抑日本に下々まで、琴をもてあそぶ事は、中比九州に玄淨法水とて、二人の僧あり、或時長崎に至て、琴の引きやうを唐人より傳はり、其後都へのほり、公家殿上の交りをなし、寛永二年の比、琴の御ゆるしを下し給りて、法水は關東にくんだり、琴をひろむる、玄淨は筑紫にかへりて、これも琴を専らに執行す、さるによりて、今在家にひける樂を、つくし樂といふ也、かよりとていやしき賤のわらや、不淨なる工商下人の家などにて、しらぶべき事にあらず、神をすゞしめ菩薩の現じ給ふ妙音なれば、四町のうちを初め奉り、月卿雲客やんごとなき人のもてあそび給ふ物なれば、そのおそれ有るべき事也、凡糸の調べやうは、まづ一越に調べんと思ふ時は、一は一越、二は下無、三は黃鐘、四は盤涉、五は一越、六平調、七は二のうは調子、八は三のうは調子、九は四の上調

執行—修行に同

子、十は五のうは調子、とは六のうは調子、いは七のうは調子、きんは八のうは調子也、残る調子もこれに准ぜよ、又雲井の調べといふ事を此比八橋檢校ひき出したり、此八橋もと三味線の上手なりしが、中年より琴を學び、不思議に、琴の妙をえて、今日本の名人となる、音聲色ざしほど拍子、中々心におよびがたき上手なり一琴を引きならひやう、會て知らざる人は、爪のさしやう、糸のおさへやうを見習ふべし、まづ大指にさしたる爪は前爪と云ふ、中指にさしたる爪を、向爪と云ふ、人さし指にさしたるを、脇爪といふ、糸の名は手前なるをきんといふ、次はいといふ、又次はとと云ふ、それより次第々に、十九八七六五四三二一也、此中におさゆる糸は、四七九八也、但引きならひにはおさへずしても苦しからず、爪かず計りよく覺えたるよし、初めには糸あはせがたきもの也、糸あはざれば何事引きてもうつらぬものなり、されば糸をよくあはすべし、但右にしるす糸のあはせやうは、調子を聞かずしてはあはせがたし、初心なる人のあはせ習ふは、初め一二度は心得たる人にあはさせて、調子よく合ひたる

ば
 三を引ての跡のうち爪は、一二をうつべし
 四を引てのあとのうち爪には、一二をうつべし
 五を引ての跡のうち爪には、二三四のあたりをうつべし
 六を引ての跡のうち爪には、三四五のあたりをうつべし
 七を引ての跡のうち爪には、四五六のあたりをうつべし
 八を引ての跡のうち爪には、四五六のあたりをうつべし
 右いづれも、次第々々におなじ心なるべし、但糸三筋うつにはさだまらず、前爪より二筋ほど先をあたるに任せうちたるもの也

▲りんぜつ引きやうの事

テン五五テン五〇三テン四テン五〇三テン四テン五〇三テン四テン五テン六テン七〇
 テン八八テン八〇六テン七テン八〇六テン七テン八〇六テン七テン八〇六テン七テン八〇
 テン三テン四テン六テン七〇テン八九〇テン十十テン十〇八テン九テン十〇八テン九テン十

テントテンイ〇テンキンテンキン〇トテンイテンキン〇トテンイテンキンテン、イ
 テントテン十〇八テン九テン十テントテンイテントテン十〇八テンイテントテン十〇八
 テン九テン十〇テント十〇八テン九テント十〇八テン九テン八テン七テン六テン五
 右すがかきの如くてんといふは、みな打爪也、その外は、いづれも前爪にて引くべし、
 又むかふ爪といふ引きやう有りまづ

一五と引く時は一は向爪、五は前爪にて引くべし
 二七と引く時は、二はむかふ爪、七は前爪にて引くべし
 三八と引く時には、三はむかふ爪、八は前爪にて引くべし
 四五と引く時は四はむかふ爪、九は前爪にて引くべし
 いづれも糸四つはざみ也、歌のうちには幾所も有るべし、よくよく心を付けておほゆべ
 き也

▲あふみをどりのうた琴引きやう

桐壺

すま

雲のうへ

うす衣うすころも

うす雪

からかみ

雪のあした

新曲

此分いづれも、一くみにうたのしやうが六づつ有り、たゞしゑてんらくは七つ有り、其外の大事のくみどもおほく有る也、中に雲井のしらべと申すは、大きにひじする事也

ひじ—祕事

糸竹初心集 下卷

三味線の次第の事

三味線の次第の事！一本には此見出の代に「三味線系竹、柳川ひでんのひきやう」とあり

抑日本に三味線をひき初めし事は、文祿のころほひ、石村檢校と云ふ琵琶法師あり、心たくみにして器用無雙の者なり、あるとき琉球の島にわたりけるに、かの島に小弓こきうといひて、糸を三筋にてならず物あり、小き弓に馬の尾を絃にかけて引くなれば、小弓とは云ふとぞ、石村これを探りみるに、琵琶をやつしたる物也、いとものしらべやうも、一二はびはのごとく、三の糸はびはの三よりも二調子ほど高くあはせたるもの也と思へり、所ものいひけるは、此島には真蛇まへびの多き所なるが、らへいかといふものありて此まむしを食物とする、さればらへいかなく聲、小弓の音ねに少しもちがはざる故、真蛇を退けんが爲に専ら引く也、琵琶法師も、爰に逗留の間は、引き給へといふ、其後石村京都にかへりて、おなじく琵琶此をやつし、三味線をつくり出せり、琉球の島よりえて來ると

いふ心にて、りうきうぐみといふ事を作りおけり、弟子虎澤檢校に残さず傳へしかば、虎澤またくみはてと云ふ事を作り出す。虎澤より山野井檢校傳受して、世にひろまる糸のあはせやうはこれも一二は琵琶のごとく、三の糸は琵琶の四の糸調子也。たやすきものに似て、はなはだ引きえがたきもの也。

一琵琶の調子まづ黄鐘の調子に合せんとおもふ時は、一は黄鐘に合せ、二は一越三は平調、四は一のうは調子也。又盤涉に合せんとおもふ時は、一は盤涉二は平調、三は双調四は一のうは調子也。のこる調子も准之、琵琶の樂にあまた有りといへども、大唐より傳へ來るは、

一上原石上
一流泉啄木
一玉樹三女

此玉樹といふ曲は、不吉の曲といひ傳へたり、然るを或人うつりをかんがへ、此中一手

引きかへたる所あり、されども此曲猶よきにしもあらず、其後またびく不吉のためしありける也、又七つばかりかきくだし、三のたよき、篠むすびなどいふ調の曲の名也、いづれもたやすくは引きえがたき事なり

三味線ならひやうの事

人の引くに心を付けばちの持ちやう、糸のおさへやうを見るべし、或は歌をひかば、まづ其歌のふしはかせよく覺ゆるが肝要也、たとへばゑをかよんと思ふに、たびくみたる物を書くはにせてかよるべし、終に見ざるものを何としてか書き出すべきや、三味線もこれにひとしく、我さへ歌を覺えずして、三味線にうたはする事、なかく成りがたき事也、先づはじめには糸をあはせ習ふが專要

糸をあはせ習ふやうの事

髪筋ほどあがり
さがり有ても一
調子ちがふもの
也一此一句再版
本になし

初めはよく引く人にあはせてもらふべし、但調子高きは糸たびく切れてわるし、少しひくめにしらべさせて、糸のよくあひたる時、上ごまより一寸ほど下に、糸三すぢながらに墨を付けおくべし、あがりさがりのなきやうに同じ處に付けおきてあはせ習ふべし、糸ゆるまれば墨下り、しまり過ぐればあがるものなり、髪筋ほどあがりさがり有ても、一調子ちがふもの也、これを證據にして糸をあはせ習ふべし、又こまのたて所かはりても、調子ちがふものなれば、こまのきはに皮になりとも糸になりとも、墨にてしるしを付け、同じ所にこま立つるやうにすべし、或人のいはく

引き習ひ糸をあはせんとおもふなよ

すみだにあへばいとあふなり

さみせんしやうがの事

しトハ ちふくらのきはにておさへ上より引くを云ふ

きトハ すぐふを云ふ

さトハ はなして上より引くを云ふ

かトハ すぐふを云ふ

つトハ ちふくらのきはにておさへ上より引くを云ふ

るトハ すぐふを云ふ

とトハ はなして上より引くを云ふ

ろトハ すぐふを云ふ

すトハ 五寸ほど下にておさへ上より引くを云ふ

てトハ すぐふを云ふ

ちトハ ちふくらのきはにておさへ上より引くを云ふ

▲一の糸のしやうが

▲二の糸のしやうが

▲三の糸のしやうが

りトハ「すくふを云ふ
 てトハ「はなして上より引くを云ふ
 れトハ「すくふを云ふ
 たトハ「五寸ほど下にておさへ上より引くを云ふ
 らトハ「すくふを云ふ

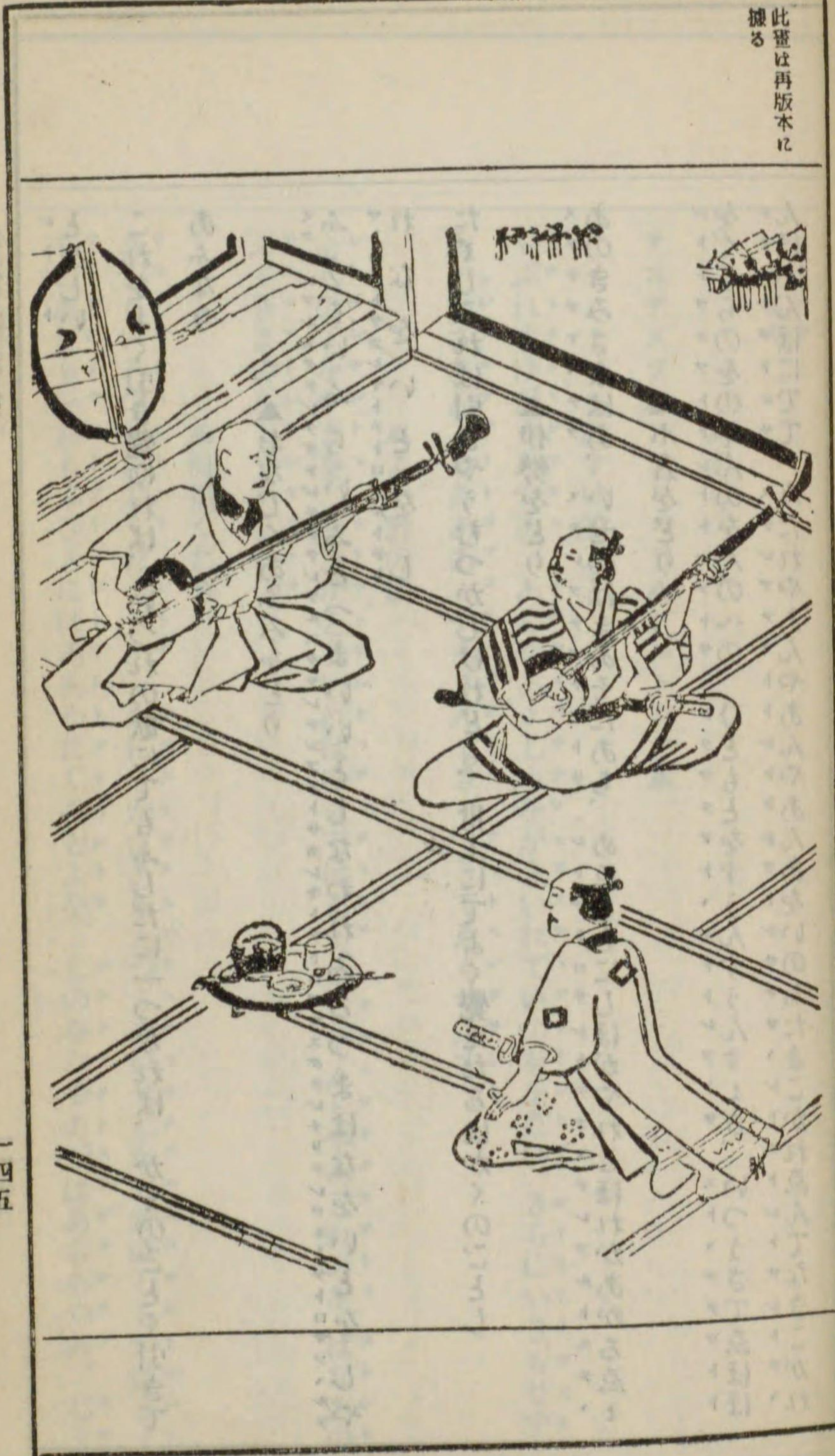
右あはせてしやうがの數十六字あり、これをよくそらにて覺ゆるほど何事にてもはやく
 引きならふ也

十六字とは シキカカトルトロ しきさかつるとろ
ステチリツレタ すてちりてれたら
 糸をおさゆるゆびは、人さしゆびなり、べにさし中ゆびにてもおさゆる事あれども、そ
 れは功者に成りての事也、はじめは人さし指ばかりにても苦しからず

▲あふみをどりのうた三味線引きやう ステツステチテ ステツステツ サシト、ツステ タテツトロツ ヤレナをよ
ステツステチテ ステツステツ サシト、ツステ タテツトロツ ヤレナをよ
 ふうらいふらい、ふるつまいとしな、われふるつまは、なをいとをしい、やれなをよ

○ふうらいふら
 い古妻いとしな
 われ古妻は猶い
 としやれ猶いと

此畫は再版本に
 據る



ぜゑんじせきやまさなりをうよちわあたりい、ひとをまあつうもをよとをにいづうくう
との

これよりさきは三味線おなじごとくに引く也

見わたせばせたの唐橋、のぢしの原やかすむらん、雨はふらねどもり山をうちすぎて、
をののしゆくとよ、すりはりとうけのほそみち、こよひはこよに草まくら、かりねの夢
は、やがてさめが井、ばんばとふけば袖さむき、いぶきおろしに不破のせきもり、とざ
さぬ御代ぞめでたき

▲小六ぶし

ころく、むまれはにしのをくにころく、そをだちやほとほんほとほん、ほとほとほん、
のをよををくはん、んとののんかといやかよかよんかよ、そんなれまことにのほんほと
をさあて、むさあしのにすうむなころく

▲柴がき

しばあがあき、しばあがあき、しばがきこをしてなああああん、ゆきいのおなふり
いそをでゑ、ちらとみいたとなあああんふりいそをでゑよゆうさいのをなんなもさ
あんよさいよゆきのななとふりいそをでゑ、ちらとみいたとなあああんあ

▲鹿をどりのうた

うらうららのせきのをしみいづうはあよ、よごとをにおつれゑどをなもをたあたあ
ぬううゑいそりや

返しおなじ事也

▲をかざき

をかざきよろしゆをかざきよろしゆをかざきよろしゆをかざきよろしゆをかざき
きじよろしゆはゑいじよろしゆ

近代山井の弟子柳川檢校、此道に心をよせ、寤寐にわすれず、天性その骨をえて當代の
名人也、色あひばちのしなやかなる事、中々凡人のわざとはおほえず、さるに依つて、

世に柳川流といふ、くみのかずは、おもて七、うら七と、その外大事ども多き中に、さかい與中島與といふは、大なる祕事とす、はてのかず、三十餘あり、中にもらんこやといふ事は、引きえがたき事也、學ばんとおもふ人はよくく習ひうくべし

一調子を聞き習ふ事、初めは圖竹一竹にて聞くべし、功者に成ては、四穴十二律にて聞くべし、十二律は昔黃帝の臣下、伶倫と云ひし人嶰谷と云ふ所の竹を切て、作り出す也、去に依て調子を業とする人を伶人と也、此調子と云ふ事は、人間のなすにあらず、天地の間に陰陽造化の氣みちくして、自然の聲音物をかつて、顯ると道理也、これ天地の妙一氣の流行不息の印也

一十千の調子と云ふは、天一の水より生ずるを、盤涉と云ふ、地二の火より生るを斷金と云ふ、天三の木より生ずるを神仙と云ふ、地四の金より生ずるを平調と云ふ、天五の土より生ずるを鳧鐘と云ふ、地六の水となるを勝絶と云ふ、天七火と成るを、黃鐘と云ふ、地八の木と成るを双調と云ふ、天九の金と成るを鸞鏡と云ふ、地十の土と成るを一

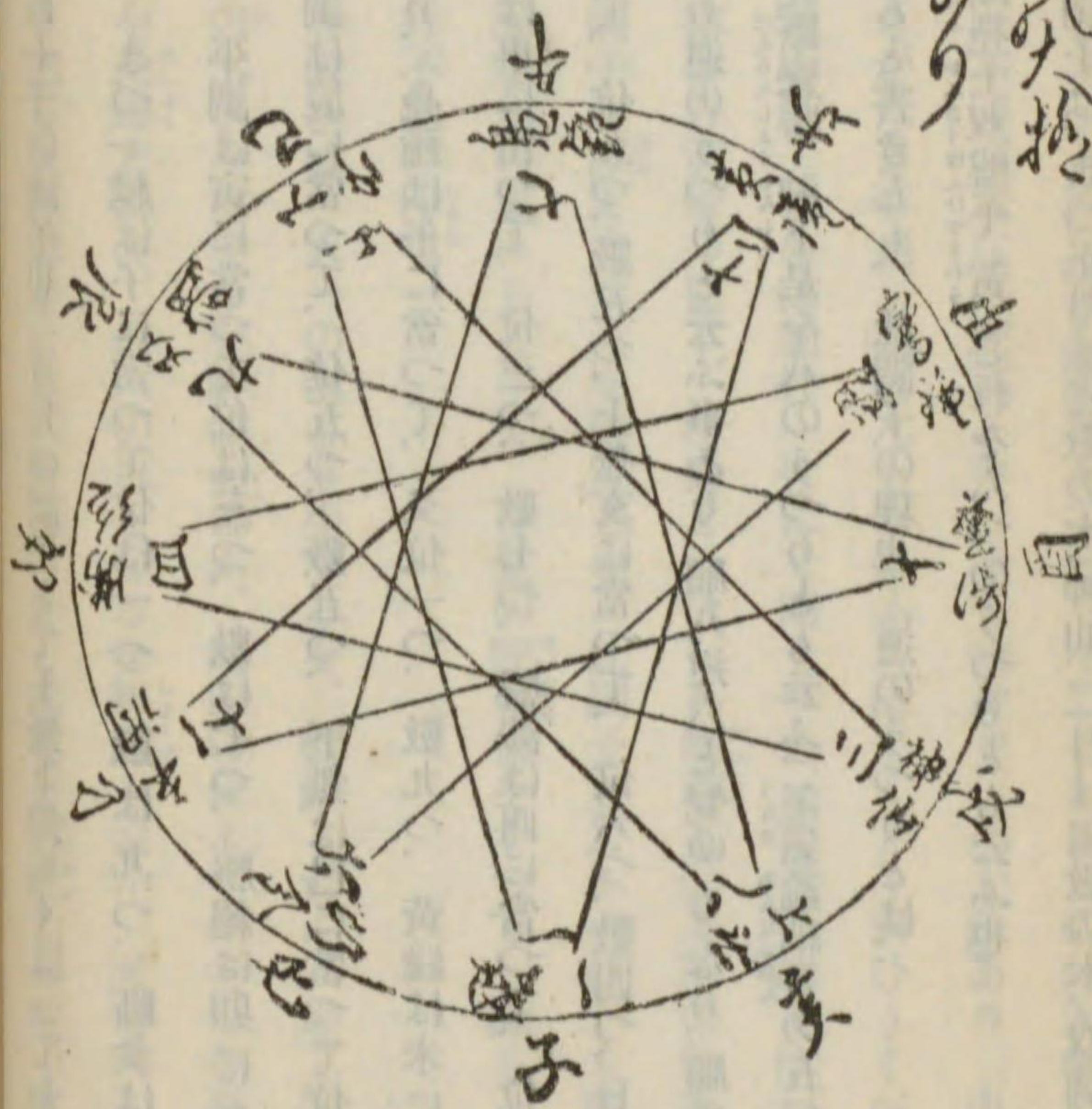
越と云ふ、これ十千の調子也、日月の調子とて上無下無をくはへて十二調子也、此十二調子の次第は、まづ一越は子に當つて位は一つ、數は九つ、斷金は丑に當つて位は二つ、數は八つ、平調は寅に當つて位は三つ、數は七つ、勝絶は卯に當つて、位は四つ、數は六つ、双調は辰に當つて、位五つ、數五つ、下無は巳に當つて位は六つ、數は四つ、月の調子はなり、鳧鐘は午に當つて、又位一つ、數九つ、黃鐘は未に當つて、位二つ、數八つ、鸞鏡は申に當つて、位三つ、數七つ、盤涉は酉に當つて、位四つ、數六つ、神仙は戌に當つて、位五つ、數五つ、上無亥に當つて、位六つ、數四つ、日の調子これなり

一又順のうつり逆のうつりと云ふ事あり、順八逆六と覺ゆるなり、順のうつりとは、一黃平、盤双、上鳧、斷鸞、勝神、下是を八のうつりとも云ふ、運氣論納音の五行に、八つをへだてて、子を生ずると書きしも、此調子の理也、逆のうつりとは、

一下神勝、鸞斷、鳧上、双盤、平黃、これを六つのうつりとも云ふ也

一又十二月の調子は、まづ正月は陰數の木、神仙、二月は陽數の木、双調、三月は陰數の土、

綱みんた
もあり



鳧鐘、四月は陽數の火、斷金、五月は陰數の火、黃鐘、六月は陽數の土、下無、七月は陽數の金、鸞鏡、八月は陰數の金、平調、九月は陰數の土、上無、十月は陽數の水、勝絶、十一月は陰數の水、盤涉、十二月は陽數の土、一越、月の調子これなり

又人の呼吸聲音の調子は、神仙、双調は肝の臟、膽の腑に通ず、黃鐘、斷金は、心の臟、小腸の腑に通ず、鸞鏡、平調は肺の臟、大腸の腑、盤涉、勝絶は、腎の臟、膀胱の腑、鳧鐘、一越、上無、下無は、脾の臟、胃の腑より通ずるこれなり

一其外生きとしいけるものは、云ふに及ばず、非情無心の草木風聲水音まで、自然の調子にあらずと云ふ事なし、然る間人の目は見んがため、耳は聞かんがため、鼻はかかんがため、舌は味へんがため也、されども調子に至つては、聞く人まれにもあらず、學ぶべきものともせず、誠にいたまじきかな、古人は牛の叫び馬嘶うまいなきを聞き、杜鵑こゝろ一聲に、世の亂るとをしる、これみな音律をえたるもの也、おろかなる人とせんや、今時の人は、耳ありても、淫聲を聞き口ありても虚うそをいひて、終に其身のあたとす、今此尺八も口に

耳は聞かんがため鼻はかかんがため此二句再版本になし

行くも歸るも
此頃松の葉の抄
節の部にあり

うちみながらも
―是も松の葉に
あり、但うちな
がむをうちむ
かふとせり

當世ことうた揃

新なげぶし

- ▶ 行くも歸るもしのぶのナみだれ限り知られぬナわが思ひヤン知られぬナかぎり知られぬナわが思ひヤン
- ▲ わかれゐる身は夢こそナたのめ打つな妻戸のナよるの雨ヤンつまどのナ打つなうつな妻戸のナよるの雨ヤン
- ▲ 亂れみだるとあのくろナ髪はわけていはれぬナわが思ひヤンいはれぬナわけてわけていはれぬナわが思ひヤン
- ▲ うらみながらも又うちナながむ月はゆかりかナうき人のヤンゆかりかナ月は月はゆかりかナうき人のヤン
- ▲ 秋の夜すがら隈なきナ月をひとり見る夜はナうらめしやヤン見る夜はナひとりひとり

物や思ふ―松の葉には「物や思ふ」と問ふ人ありばせめて語りて慰まん」とあり

- ▲見る夜はナうらめしやヤン
- ▲初音のかしや身はほとナとぎす八聲もろともナなき明かすヤンもろともナ八こゑ八聲もろともナなきあかすヤン
- ▲物や思ふと問ふ人ナあらばいかが答へんナ袖の露ヤンこたへんナいかがいが答へんナ袖の露ヤン
- ▲よしやいとばつらしとナわれは戀のためしにナ身をなさぬヤンためしにナ戀のこひのためしにナ身をなさぬヤン
- ▲逢はぬ昔とあひ見てナのちといづれ思ひはナいかならんヤン思ひはナいづれいづれおもひはナいかならんヤン
- ▲思ひわするな千代ふるナとても契りかはせしナかねごとをヤンかはせしナちぎり契りかはせしナかねごとをヤン
- ▲あだになすなよその夜のナちぎりかはす言葉のナひとすぢにヤン言葉のナかはすこと

ばのナ一筋にヤン

- ▲三輪の神かやよるくナ通ふひるは人目のナしけければヤン人目のナひるは晝は人目のナしけければヤン
- ▲人目おもへば戀しとナだにもいはで戀しきナわが思ひヤンこひしきナいはでいはで戀しきナわがおもひヤン
- ▲あふにかへなば命もナすてよよもに浮名のナ立たばたてヤン浮名のナよもによもに浮名のナたたばたてヤン
- ▲またの御見はひとむらナしぐれ定めなき世にナ袖ぬらすヤンなき世にナさだめ定めなき世にナ袖ぬらすヤン
- ▲むぐら茂りて荒れたるナ宿は秋はきにけりナ人しれずヤンきにけりナ秋はあきはきにけりナ人しれずヤン
- ▲當世かがぶし

まれにあふ夜―
此頃洞房語園に
は「忍ぶ」を「包
む」、「それもま
た」を「愛も又」
とあり
あかぬ別れ―洞
房語園には「あ
かぬ」をつらき
「告げわたる」を
「鳥も又」とあり
雨のふる夜―松
の葉には上半を
投節とせり

●君とわが中、柴垣ごしよ、人はさがなやゆひたつる、此身はやけよ逢はねばならぬ、たとへ淵瀬にしづむとも

●まれにあふ夜は、人目を忍ぶ、せめて夢にはうちとけよ、とは思へどもそれもまた忍ぶ御見にみしゆゑか

●あかぬ別れを、思ふもしらで、いつもながらの鳥の聲、とは思へども告げわたる、鳥もつとめの身ぢやものを

●雨のふる夜は、ひとしほゆかし、いつに、おろかはなけれども、残る言の葉、おもへばゆかし、いつにおろかはなけれども

●人につれなく、あたりもせぬが思ふ人には逢ひかぬる、とは思へどもそれもまた、逢はぬさきだにあるものを

●ういぞ流れの、女とむまれ、貞女、ふたりの道そむく、しかしまことの心の水は、君が外には汲ませまい

光る源氏―洞房
語園には上半の
みにて「契かな」
をくり返せり
おほしめすやら
―若みどりに
は「ねやの空柱」
以下を出せり
いとさびしき
―松の葉には前
半のみ出せり

ささのうで―酒
飲んで

●ゆかり思へば、春日の里の、昔男がなつかしや、若紫のこひごろも、昔男がなつかしや

●光る源氏の、おもひの螢、つよむともなき契かな、その玉かづらたまさかに、包むともなき契かな

●おほしめすやら、その戀風が、きては枕にそよくと、ねやの空柱うきねの床に、きては枕にそよくと

●いとさびしき、寢覺の床に、涙なそへそほとよぎす、昔を忍ぶわが袖に、涙なそへそほとよぎす

▲さんやどてぶし

「戀の關守、たがするおきた、おもふ敵には、あはでぞ歸る、つらき人日や、かの業平の、歌の心に、いかなる君も、あはどおゆるしやれ名も立たじ

「ゆめの、うき世に、ささのうで、遊べ、あすはこひしき、昨日の、むかし、たれかち

とせの、月日をおくる、今宵かぎりと、いよでたをのこ、強きお酌しやくにいかなる下戸も
つがばおのまさんせのも酒を

「唄の、一ふし、たれぞときけば、籬まがきながらも、かくれはあらじ、君の、お庭の、草葉
となりと、強き、ゆふべの、風ともなりし、吹かば靡かさんせ名もたよじ

「うらむまいぞよ、つれなき君を、人のつらさも皆われからよ、あまの刈る藻にすみぬ
る蟲が、思ひかひなき涙の色、お笑ひあるな名のたつに

かよるさんや
洞房語圖には露
を草とし「われ」
を「われぢやに」
とせり

「かよるさんやの露ふかけれど、君がすみかと思へばよしや、玉のうてなも、おろかで
ござる、人はともいへやれかくもいへ、よその見るめも、いとほぬわれを、お笑ひあ
るな名のたつに

「つらき、人より、つれなき命、あすは露とも消えなば消えよ、こよひ、ばかりと、定
めたをのこ、つよき心に、いかなる君も、引かば靡きやれ名の立つに

「つひにのがれぬ、無常の世界、死なんさきより焼かるよ此身、胸のけぶりは山谷さんやの野

邊の、鳥ともろとも歌はば歌へ、さよんせ盃のも酒を

▲ろうさい

▲戀にこがれて露とも、消えば、あとはとにかく、君たのむ

▲立つる錦木かひなく朽ちて添はで年ふる身ぞうらみ、葛の葉

▲いつの月日に相馴れそめて、今ははなりようかうらめしや、なにの因果にあひ馴れそ
めて、人目つよめばうやつらや泣くも泣かれず

▲山のはに西へ東へわたりしさと月つきの光はひとりものかは

▲山のはになさけないその身はおしどりの、いはで年とる、身ぞつらき

▲松の林のこのしたかけも君がござらにやうらめしや

▲夢の世に見たや聞きたや、山ほとよぎす、姿ならずは聲なりと

▲江戸ろうさい

○つらき人、より、つれなき命さても、はかなのわが身やな

戀にこがれて
此句淋敷座之戀
には「こがれ」
がれてとあり
立つる錦木―松
の葉には「身ぞ
うらみ葛の葉を
身ぞつらき」と
あり

阿波のなると
洞房語園には、
「とは思へども
世の中の人の心
は飛鳥川」の句
を後に添へたり

○いとどその、夜もく、歎きて、あかす、床もく枕も深く、ばかり
 ○思ひきろ、とはく、たよりの、なさけ、じつはく、浮世の、すて、ことば
 ○忘草、がなく、一もと、ほしや、折りてく、そだてく、見て、わすりよ
 ○阿波のなる、とにく、身は、沈むとも、君の、仰せはくそむく、まい
 ○頼むまい、ぞのく、つらきの、君を、あふせくくに、かはる身を
 一とりのねも、鐘もきこえぬ里もがな、ふたりぬる夜の、かくれがにせん
 一篠竹しのたけの、窓の嵐に目がさめて、君もおよらず、われもねいらす
 一ながらへば、また此頃やしのばれん、憂しと見しこそ、八幡はちまんこひしき
 一手に手をしめて、ほとくとたとく、われは、そなたの、てつごみか
 一山のはこそ、月はあれ戀路のみちに月はあらじな
 一思ひきれとは、身のまよか、たれかは切らん、戀の道
 一阿漕が浦にひく網も、たびかさなれば人も知れ、さりとていなの小笹せせぎのせめて一夜ひとよ

は

一菊のませがきゆひそめて、なかく今はなかくいまは昔こひしや身のうさを
 いせぶし

■秋の夜の鹿はないても明かす、人目忍べばうやつらやエイ泣くも泣かれず、忍べばつ
 らや人目エイしのべばうやつらやエイなくもなかれず

くわんとうほそり

大ざかくだりに、十七こちよろにゆきあうた、とのとねたやらのさて、髪がそよけたし
 ばし、おまちやれ、誓文たてと聞かしよに鹿島香取かしまかんとりや諏訪熱田までうきすの明神伊勢や
 熊野さ愛宕白山はくさんとのと寝はせぬ、けさの嵐にのさて、髪がそよけた

八幡山飯ふり

山本十道兵衛

八幡町通ふや町角

山本七郎兵衛板

當世こうた揃終

松の葉

松の葉序

それ吾朝の音律は天の鈿女の命より起りて霞ふるらし外山のかつら色に見ゆるをいかにせ
 んと庭燎の唱歌にはじまりける、かつ人王百七代正親町院の御宇永祿の比琉球より蛇皮二
 絃の樂器渡り、和泉の國堺にすめる琵琶法師中小路が手につたへ、長谷の觀音の靈夢によ
 りて一絃のまし三絃とせしを世に三味線と呼びて、しらぶる音にあらゆる呂律そなはらず
 といふ事なし、是一より二を生じ二より三を生じ、三より萬物の音聲を生ずる理いたれり、
 かの中小路より石村虎澤澤住相うけ、次て寛永に攝州に加賀都城秀堪能ならびなく、九重
 に遊び東武に跪き官職に昇進して、加賀都は柳川、城秀は八橋、みな僧官に准じて檢
 校に經のほりければ、此三絃の鼻祖兩家の棟梁とはなれりける、傳ふる所本手端手新曲綿
 蠻として、淺利檢校佐山檢校出田檢校市川檢校朝妻檢校藤島勾當、今や都には小野川檢校
 三橋檢校猶等覺一轉のひかりをあらそふ藤永勾當熊川勾當松澤勾當木崎勾當早崎勾當豊田
 勾當清田勾當倉橋座頭等、武藏には岩崎檢校豊橋檢校連川勾當安數川座頭等、雪上に霜く

ははり錦江に桃花たぐわひるがへ翻り、塵動ちりうごき雲逗くもどるの功、妙手めうしゆとして十の指ゆびさす達人たうじんなり、やつがれとしごろ閑暇かんがの茶菓さくわに是をもてあそびて、知音ちいんのこよろざしありければ、よりよりの本手ほんて端手はんで長歌ながうた端歌はたが吾妻づまじやうり淨瑠璃しんきよく新曲しんきよくの唱歌しやうがを草書さうしよし、かつ古今ここんひやくしゆ百首ひやくしゆの投節なひせしをくはへ、花くわしん晨しん月げつ夕せきの心こころやりにかいつくるを、ある人ひとねもごろの求もとめに應おじて、櫻木さくらぎに命いのちながうせんとするにまかするもの也、此花このはなのもとにあそぶ好士かうしあらば徳孤とくこならず吾われいづくぞかくさんや

于時とき元祿げんろく十じゆあまり癸みづのせの未龍ひつじりやうしゆ集しゆの涼すずみ月秀つきしう松軒しょうけんの木このもとにかきあつめぬれば、松まつの葉はと名なづけぬるもむべなるべし。

松の葉 第一卷

○三味線本手目録

- 一 琉球組
- 二 烏組
- 三 腰組
- 四 不祥組
- 五 飛驒組
- 六 忍組
- 七 浮世組

此七曲を本曲といふなり、石村虎澤琉球國より相傳のうへ、手をなほし加へて一作となし、今の世に至りて三味線第一本手組の濫觴らんざうとなれり

○端手目録

- 一 待つにござれ
- 二 葛の葉
- 三 比良や小松
- 四 長崎
- 五 下總ほそり
- 六 京鹿子
- 七 端手かたばち

此七曲を新曲といふ、柳川檢校作也

○裏組目録

一 賤 二 錦木 三 青柳 四 早舟 五 八幡 六 翠簾 七 なよし
 此七曲柳川檢校作也、此内早舟相傳の時師へ一禮の法式あり

○三湘麻本平目袋

松の葉

本手

○琉球組

○比翼連理よの、天にてる月は十五夜がさかり、あの君さまはいつも盛りよの
 ○おらひを志賀の松の風ゆゑに、しなでこがるよく
 ○深山おろしの小笹の霰の、さらりさらりとしたる心こそよけれ、険しき山の九折の
 かなたへまはり、此方へまはり、くるりくるるとしたる心は面白や
 ○とろりくとしむるめの、笠のうちよりしむりや、腰が細くなり候よ
 ○とても立つ名がやまばこそ、此方へお寄りやれのう、柴垣ごしに物言はう
 ○小原木買はいく黒木召さいの、てうりやうふりやうひのやりやにひやるろ、あらよ
 ひふりやうるりひようふりやう

○鳥組

てうりやう云々
一はやし詞なり

たいが—大河か

世にふる—世間
にひろがる

てはのしほや—
出羽の鹽屋か

○鳥もかよはぬ山なれど、住めば都よ我里よ

○我戀は千本小松の枯るるほど、たいが水ひて埃たつほど

○みるめばかりの戀をして、千賀の鹽釜身を焦す

○いへば世にふる、言はねば心もだくと

○お目と目と目を見合せて、はなれ難なのその、佛を夢にも見もせず、うつよになりとも逢せてたもれ、逢ねば心もだくと、おもひの種や、あこがるよ身をなにとせう

その

○京では一條柳屋が娘、四割帯をたすきに掛けて、いかにも腰が、しなやかなく

○いざ詣ろ六地藏へ、ほとけに隔はなけれども、さりとはではのしほやが建てた六地藏、えいそれしほやが建てた六地藏

○忍びの殿様にふらんとさけさしよ、縁のあるゆる餘念がないよの

③腰組

○腰に下げたる巾着は、これも愛き人の縫ぢやほどに

○道で見たりともわすれまい、枝垂やなぎの振ぢやほどに

○雨はふるとも雪ふるなさ、忍ぶ細道の笹の撓むに

○成ると成らずと文をばつくせ、心強やつれなや、とにかくに我は數ならぬ身ぢやほどに、君來うかく往こか、こずは戻ろに

○一夜ふた夜と馴れ染て、明日は舟づる、なとせうその、恨めしや

○いやと言つたものかき口説てのう、何ぞやそなたのひと花ごころ、思へや君さま、叶へやわが戀、あらうつよなの浮れ心や、揉まいのくさどら揉まいの、我等も若い時は殿にもん揉まれた

④不祥組

○若い那不祥で負ひまるらせうかの、背門柴垣の破れたを

○思ふまいとの鉦を、ちんからころりと打てば、罰やら猶おもはるよ

舟づる—舟が出
る—何と
なと—何と
ひと花ごころ—
一時の浮氣心

わざくれーまゝ
よ

めぐすしー目醫
者

こしめせーきこ
しめせ
れいしよらじや
うー靈照女か
こだけー小竹

○橋にわが身を投掛けて、渡らせうよの、とろくくくと、やれ渡らせう

○月の夜に打つ砧の音の、えいはらくはろくはらほると、又してもおどろく夜もくあるに、獨り寝よとは何事ぞ、思はざなきそ、増す花狂しよすもの、わざくれ

○わざと來んとはおしやれども、眞實おもへば恥も人目もおもはくも、思ひ出されぬものぢやもの、しかしながら君は只増花のあるゆる

○十七八はうんえいこゝり長押のほこり、皆殿達の、目に入りたく、目に入りたらば薬師へこもれ、薬師の前で、めぐすししよく

五 飛驒組

○弓矢八幡寝はせねど、寝たとおしやらば、たとせうぞの

○一つこしめせたぶくと、殊にお酌は忍妻々々、れんほれれつもの、れいしよじやうにそはどれつもの

○これの千代女がかみわけは紫竹こだけに四の節、加賀や越前美濃尾張越後京根來粉河

ぢよすものーて
ようもの

坂本で所望めされた

○あすはぢよすもの、舟がぢよすもの、おもたけもなとおよる殿ごや、あよお寝る殿ごや、飛驒のをどりを、ひと踊りノ

○船のなかには何とお寝るぞ、苦を敷寝に楫を枕に、ひんだのをどりを一踊々々

六 しのび組

○いよ忍びくくて心嬉しや、梅に囀る鶯の、夜は梢に宿るとも

○思ふまいよの、やれそれほどに、顔に紅葉の立田山

○いとま乞には來たれども、碁盤面で目がしけければ、まづお待あれ、柴の編戸も押せばなる、あはれ霞がはらほると降れがな、其間にあよ笑止や立つ名や、笑止と立つ名

や、忍踊はおもしろやく
○戀をせばく、二十三夜の月を待て、月の偽なきものを、ててててからこしやんぎしやかんこはらりついやひよついやくつやにちやうらゝにやうつほよ、忍踊はお

もしろやく

○我戀は緞子の袋にいろ小袖、何と包めど色にいでさふる、やれいで候、逢見てのちは何とせうぞの、戻ろやれ、しやならくと

⑦浮世組

○誰も浮世はかりの宿、さのみ人目を包むまじ、よやきみしやりり
○文もやるまい便宜もせまい、返事さへせぬ憂さつらさ、君をば人に思はせて、かほどにつらきものぞとおんもひ思ひ知らせとは思へども、身の上になれば更に思ひ切れぬ

○とても立つ名に寝てござれ、ねずとも明日は寝たとさんだんしよ、花の踊をのう、花の踊を一をどりの踊を一をどり

○我は小鼓殿は調べよ、かはを隔てよのう、かはをへだてよ寝にござる、花の踊をのう、花の踊を一をどり

さんだん一讀
嘆、いひはやす
の意
かは一皮、川
寝一音にかく

なる一成、鳴

○いとし若衆と小鼓は、しめつ緩めつしらべつよ、寝入らぬさきになるかならぬかく
○みやまやるまい、深山瀧の水はうちやうていつく、ちやうど打てば、うちやうていつく、つくくしんたんたらつく、丁ど打つ、若衆をどりを、のう若衆踊を一をどり

葉手

○まつにござれ

○待つにござりたいとしの君やのう、今夜ござらざ焦れ死のう

○とても縁なき中ならば、などや始のつらからん、いとど烈しき吹上濱に、とりを限にかのさま待てば、寒き嵐も身にしまぬ

○われが殿御はとう五郎どの、朱雀粟田口より石また曳きやる、えいややころさにやつというて曳きやる、お聲きくさへ四肢が萎ゆる、まして添うたら死のすよの

○君と我とはのや篋の絲の、切れて離れてまた結ぶ

とり一雞鳴